

羽犬塚屋鋪ノ二遺跡

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第 108 集

2013

筑後市教育委員会

羽犬塚屋鋪ノ二遺跡

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の調査

2013

筑後市教育委員会

序

本書は、平成 23 年度に行った羽犬塚屋舗ノ二遺跡の発掘調査に関する報告書です。

当遺跡は市の中心部に位置し、江戸時代に宿場町として整備された羽犬塚宿の中に所在します。羽犬塚宿における町屋部分の発掘調査は今回が初めてであり、多くの貴重な情報を得ることができました。

また発掘調査から報告書刊行に至るまで、株式会社マミーズをはじめとする各関係機関、工事関係者、有識者各位には多大なご協力とご援助をいただきました。ここに心から感謝を表する次第であります。

本書が今後の地域史再現、文化財保護への理解を深める一助となれば幸いです。

平成 25 年 3 月

筑後市教育委員会

教育長 高巣 一規

例言

1. 本書は株式会社マミーズのマンション建設に伴い、筑後市教育委員会が平成23年度に実施した羽犬塚屋鋪ノ二遺跡第1次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した遺構実測図は小林勇作・上村英士・吉村由美子が製作し、デジタルトレースは西田富美的協力を得た。
3. 本書に使用した遺物実測図は丸山裕見子が作成し、デジタルトレースは西田の協力を得た。
4. 本書に使用した遺構写真は吉村が主に撮影し、遺物写真は立石真二がこれを撮影した。
5. 本書に使用した座標は国上調査法第II座標系(世界測地系)であり、標高は海拔、方位はG.N.である。6. 本書に関する図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。
7. 本書の編集、執筆は立石が行った。

目次

第1章 調査経過と組織	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査成果	4
第4章 結語	44
写真図版	

第1章 調査経過と組織

本調査地点は筑後市大字羽犬塚字屋舗ノ二に所在する。ここに対し、株式会社マミーズより埋蔵文化財に関する申請がなされたのは平成 23 年 11 月 11 日である。筑後市教育委員会はここが「羽犬塚町」の中に位置することから同 16 日に予備調査を実施、埋蔵文化財が包蔵されていることを確認した。教育委員会は施工主である株式会社マミーズと協議を行い、建築物の構造上、遺跡の破壊は回避できないことから発掘調査及び記録保存を実施し、平成 24 年度中に報告書を刊行することで合意した。また、遺跡名としては近世宿場町である「羽犬塚町」であるが、今回発掘調査を行うにあたり地名を探って「羽犬塚屋舗ノ二遺跡」とした。現地での調査期間は平成 24 年 1 月 23 日より 3 月 20 日までである。

【調査組織】

筑後市教育委員会

総括	教育長	高巣 一規
庶務	社会教育課長	高井良清美
	文化スポーツ担当係長	村上 一彦
	(文化財担当職員)	小林 勇作 上村 英士
	(文化財学芸員)	吉村由美子 (～平成 23 年度・発掘調査担当)
	(文化財調査員)	立石 真二 (平成 24 年度)

2. 発掘調査参加者

井上むつ子	今山三咲子	植田 勝子	加々良一美	加藤 礼子	隈本 干城
城崎マスヨ	角 里子	田島ヤス子	田島 好江	堤 義弘	中村 富男
原 秋子	堀田 武利	三瀬美樹子	渡辺 泰子		

3. 整理作業参加者

丸山裕見子 (整理補助員) 辻 美穂 宮崎 彩香

4. 整理作業協力

西田 富美

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域を九州新幹線、JR鹿児島本線および国道209号が縱断し、これと交差するように国道442号・442号バイパス道路が横断する。北部は耳納山系から派生した八女丘陵が西に伸び、溜池が点在し果樹園や茶畠が広がる地域である。市の南側を整流する矢部川に由来する東部の低位段丘や南西部の低位地域は農業水路が発達した米・麦・いちご栽培を中心とする田園地帯であり、当市は県内有数の農業地帯となっている。市街地は国道に沿うように市の中心部に展開するが、近年では拡散する傾向が見受けられる。

今回報告する羽犬塚屋舗ノ二遺跡は山ノ井川の右岸、標高約17mほどの微高地に立地し、筑後市街地の中心部に位置している。

2. 歷史的環境

羽犬塚屋鋪ノ二遺跡周辺の遺跡では、南西方向の山ノ井川流域に弥生時代から古代に繋がる若菜大堀遺跡が所在する。また東側には律令期に市域を南北に縱断するように作られた古代西海道があり、北側には付随施設である「葛野駅家」関連と思われる遺跡群が展開する（前津丑ノマヤ遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡、羽犬塚中道遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡、徳久北原遺跡、山ノ井川口遺跡など）。これらは8～9世紀に中心を持つものである。『和名類聚抄』には筑後国上妻郡に「葛野郷」があるが、これは近年の西海道及び駅家研究の面から羽犬塚周辺ではないかと考えられている。

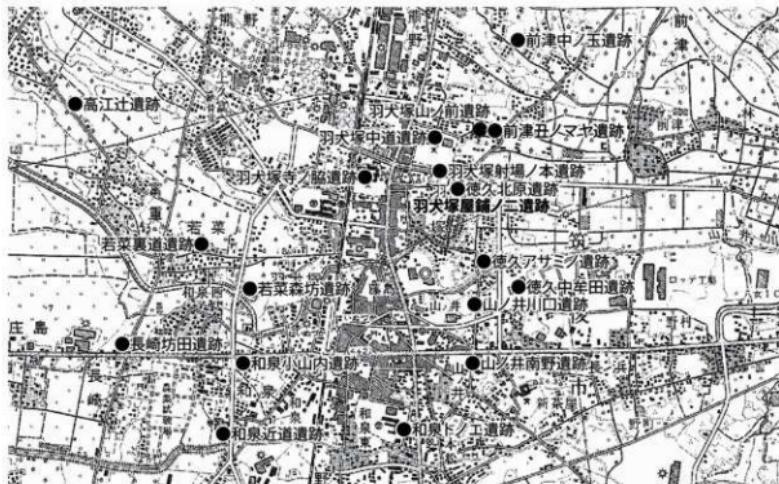


Fig. 1 周辺遺跡分布図主要 (S = 1/25,000)

鎌倉時代になると「徳久名」(大字徳久)、「秋松名」(大字山ノ井字秋松)、「若菜名」(大字若菜)が(岡本文書・1234)、室町時代には「前津村(大字前津、川原文書・1437)と、周辺部の地名を見る事ができるが、羽犬塚の初見は戦国時代の諸記録を待たねばならない。この頃の羽犬塚はすでに街道沿いの宿場として機能していたようで、島津軍の上井覺兼が帰国際に休息し、九州仕置きの際には農臣秀吉が平井鉄物司の邸宅で休息したという伝承も伝えられている。

宿場町として本格的に整備されたのは久留米有馬藩の頃で、宿場の南北に構え口と枠形が設けられ、平井鉄物司の屋敷跡には御茶屋が設けられた。この他には高札場・惣会所・牛馬会所・人馬問屋場などが設けられていたが、旅籠屋は8軒と少ない。

羽犬塚町として発掘調査が行われたのは平成10年の羽犬塚寺ノ脇遺跡があるが、これは御茶屋部分での調査であり、町屋部分での発掘調査は今回がはじめてとなる。ここは旅籠屋が存在したとされる一角に近接している。地域の方によると戦後しばらくここは料亭だったとのことである。その後スーパーマーケットを経てレンタルビデオ店が営まれ、現在に至っている。



Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

【参考文献】

『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1995	筑後市史編さん委員会
『羽犬塚寺ノ脇遺跡』	筑後市教育委員会	2000	立石真二
『筑後市内遺跡群IV』	筑後市教育委員会	2002	小林勇作
『羽犬塚山ノ前遺跡』	筑後市教育委員会	2003	上村英士
『山ノ井南野遺跡II』	筑後市教育委員会	2005	上村英士
『筑後市内遺跡群VI』	筑後市教育委員会	2005	永見秀徳
『前津庄ノマヤ遺跡』	筑後市教育委員会	2007	上村英士
『筑後市内遺跡群X I』	筑後市教育委員会	2008	
『高江辻遺跡』	筑後市教育委員会	2010	上村英士
『筑後市内遺跡群X III』	筑後市教育委員会	2010	
『筑後市内遺跡群X IV』	筑後市教育委員会	2011	吉村由美子
『徳久アサミノ遺跡』	筑後市教育委員会	2012	上村英士

第3章 調査成果

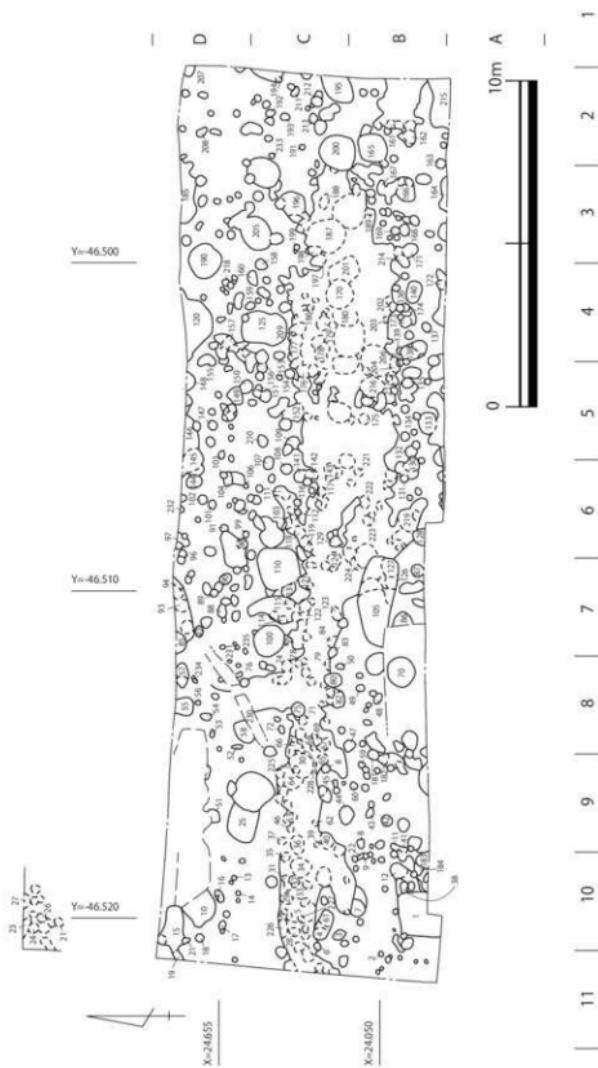


Fig.3 羽犬塚屋鋪ノ二遺跡 遺構配置図 (S = 1/150)

1. 檢出遺構

羽犬塚屋鋪ノ二遺跡は遺構の密度が高く、特に柱穴列A・B周辺では遺構検出が困難な状態であった。そ

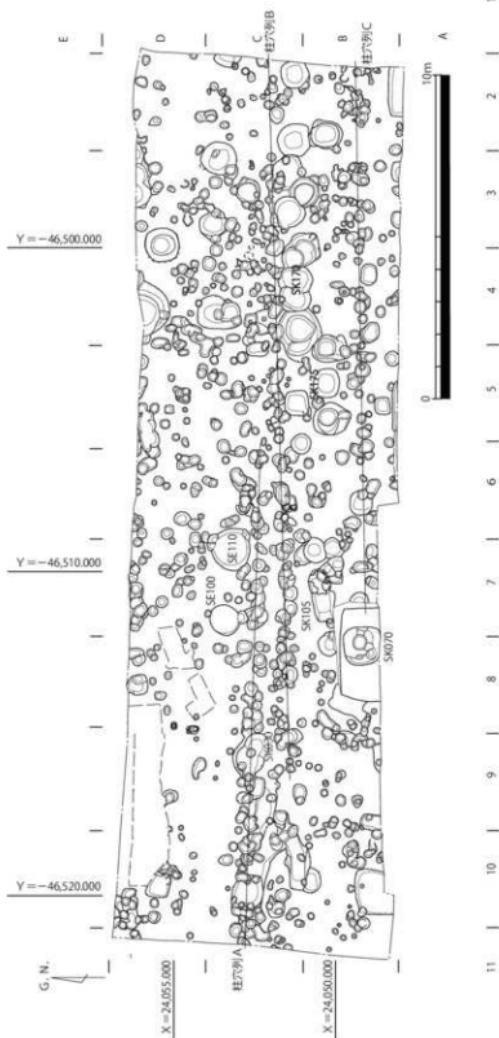


Fig.4 羽犬塚屋舗ノ二遺跡 全体図 (S = 1/150)

の為多くの遺構の切り合い関係は不明である。調査時点では柱穴列2条（A・B）、井戸状遺構2基、埋甕遺構4基、焼土坑1基を明確な遺構として確認している。また、整理作業中に柱穴列の可能性があるもの（柱穴列C）を確認した。多数の柱穴が確認されているが、埋土状況に不明な点が多い為建物復元は行っていない。また、中型の土坑も多く確認されているが、埋土状況が不明なことと遺物量が僅かな量であることから遺構としての報告は割愛している。

柱穴列 (Fig.5)

柱穴列A

調査区の中央をほぼ東西に走る柱穴列で、調査区西側に延びていくと思われる。柱穴列Bと共に遺構密集地点の北側ラインを形成している。

柱穴列B

調査区の中央をほぼ東西に走る柱穴列で、調査区東側に延びていくと考えられる。柱穴列Aと共に遺構密集地点の北側ラインを形成している。柱穴列Cとは主軸の傾きがほぼ同方向を探り、何らかの関連性があると思われる。

柱穴列C

調査区の南側をほぼ東西に走る柱穴列で、調査区の東西へさらに延びていく可能性がある。遺構密集地点の南側ラインを形成している。柱穴列Bとは主軸の傾きがほぼ同方向を探り、何らかの関連性があると思われる。

井戸状遺構 (Fig.6)

S E 100

C 7グリットから検出された幅約1.0m弱の平面円形プランを持つ井戸で、断面形はラッパ上に開くと思われる。一定の深さまで掘り下げたが、これ以上は安全性の問題から掘削をあきらめた。土層観察がなされてもおらず、井戸枠等の構造を想定することはできない。

ここからは大量の陶磁器・土師器が出土しているがその多くが近現代のものと思われる。出土状況なども記録がない為不明である。

S E 110

C 6・7グリットから検出された幅約1.3m前後の平面円形プランを持つ井戸で、断面形はラッパ上に開くと思われる。一定の深さまで掘り下げたが、これ以上は安全性の問題から掘削をあきらめた。土層観察がなされておらず、井戸枠等の構造を想定することはできない。

ここからは土師器の瓶、土鍋、陶器碗などが出土しており、近世のものと判断している。

焼土坑 (Fig.7)

S X 105

B 6・7グリットから検出された長さ約1.5m、幅約0.7m前後、深さ約0.2～0.3mの遺構で、炭化物が

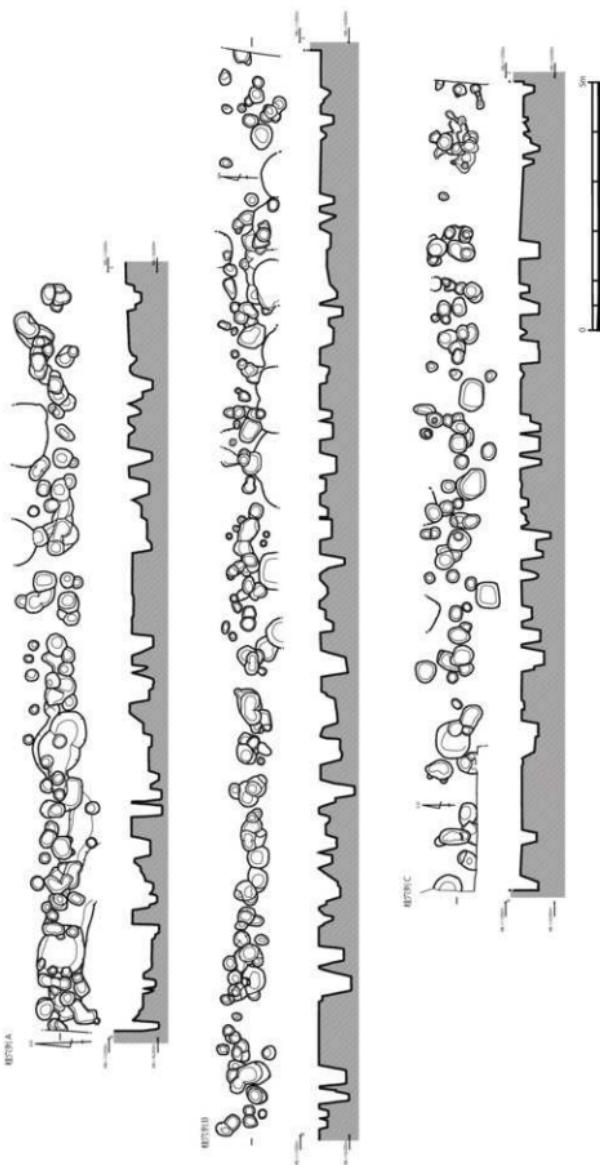


Fig.5 柱穴列 ($S = 1/100$)

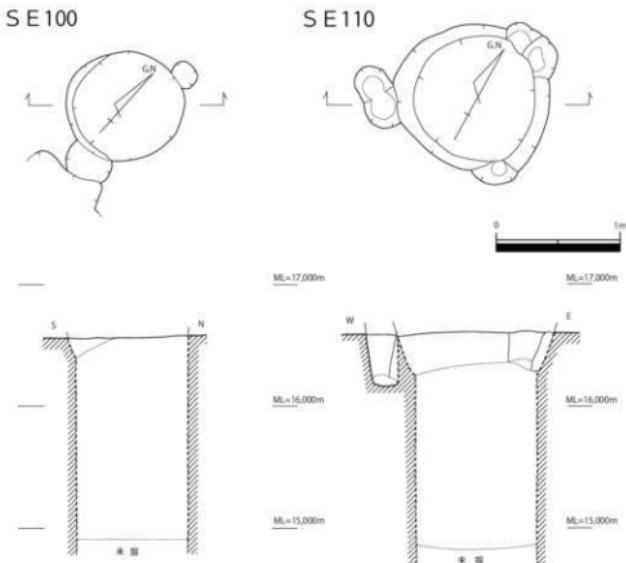


Fig.6 井戸状遺構 ($S = 1/40$)

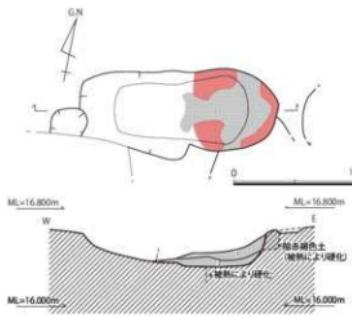


Fig.7 焼土坑・SK 105 ($S = 1/40$)

集中する東側が深くなっている。炭化物は上層に大粒、下層に粒子の細かいものが堆積しており、焼土はこの周りを中心に分布する。調査担当者はカマドと判断しているが、記録的には作業日誌に「白色粘土一部裁 粘土外したところで撮影」としか記載がなく図面にも反映されていない。出土品には粘土やカマド部材を思わせるようなものではなく、土鍋・土師器片・陶磁器片が出土している。

埋製遺構 (Fig.8)

S K 030

C 9 グリットから検出された遺構で、柱穴列 A に切り込む。幅約 0.8 m 前後の円形プランを持つと考えられる。深さは約 0.3 m。埋設・毎土状況などは不明。

遺物には素焼きの大甕のほかに現代陶磁器、現代瓦が出土している。

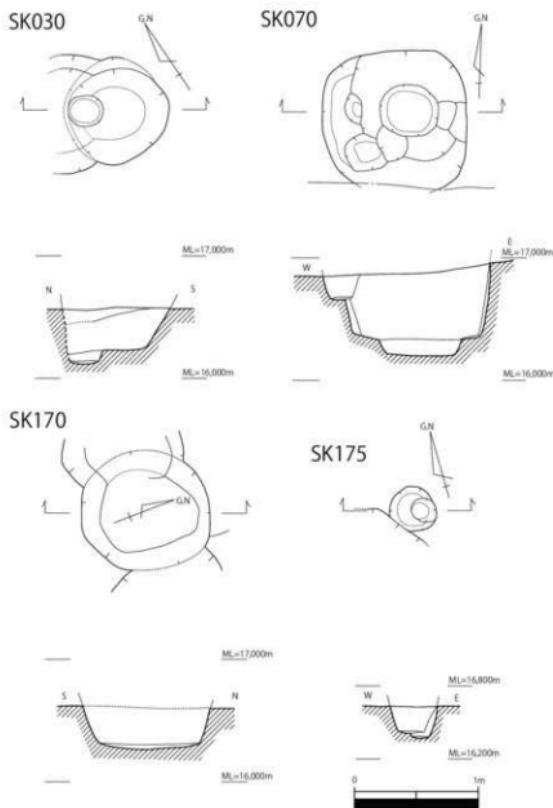


Fig.8 埋甕遺構 (S= 1/40)

S K 070

B 8 グリットから検出された大型の甕で、幅約 1.2 m の隅丸方形プランを有する。深さは約 0.7 m。埋設・埋土状況などは不明。

遺物には近現代の陶磁器、瓦、素焼き物が含まれているが、その中に水田上仁良葉遺跡から出土した型で作成された水田人形が含まれている。

S K 170

B・C 4 グリットから検出された遺構で、幅約 1.0 m の円形プランを有する。深さは約 0.3 m。西側に白色粘土を充填して埋設されていたが、それ以外の埋設・埋土状況は不明。

出土品には陶器、車止めと思われる石製品、スレート材がある。

S K 175

B 5 グリットから検出された遺構で、幅約 0.4 m の円形プランを有する。深さは約 0.2 m。裏込めはなかつたそうだが、埋設・埋土状況は不明。

出土遺物には土師器・陶磁器・瓦などがある。

2. 出土遺物

柱穴列 A 出土遺物

P028 出土遺物 (Fig.9-1)

1 は土師器の环。中世の所産。

P005 出土遺物 (Fig.9-2 ~ 43)

土師製品: 2・3 は小皿で、2 には口縁部に油煙があり灯明皿か。4 ~ 7 は土鍋の口縁部で、素口縁のもの (4)、沈線を施したもの (5)、断面三角形の粘土帯を施したもの (6・7) の 3 タイプが存在する。8 は土鍋の底部。9 は土玉で直径約 1.4cm。土鈴の内容物か。

陶器: 10 は卓と思われる。内面および外面部に鉄釉を施し高台は露胎、回転糸切りが認められる。11 ~ 14 は碗。11 は高台を割り出し胴部に明瞭な稜を設けて口縁部を立ち上げている。高台部以外は施釉され絵付も施されているが文様は不明。釉薬も白っぽく二次焼成を受けた可能性がある。12 は全面に施釉しているが赤茶色であり、二次焼成を受けた可能性がある。13 は高台削り出し、底部以外に施釉しているが、二次焼成を受けおり薄橙色に変色している。14 は高台を削り出し、底部以外に施釉後、内面見込みを輪状に焼き取っている。15 は香炉もしくは灰入れで、口縁部は内側へ直角に折り曲げ高台部分は削り出し。粘性の強い白色釉を体部外表面および内部上半に施し呉須で島影を描く。16 は鉢の口縁部で、断面四角形に肥厚する。外表面は 3 条の平行沈線により文様を施し、外面上半と内面に白色釉を施す。17 は片口の口縁部破片。口縁部を断面四角形に肥厚し、注ぎ口は現存していないが口縁部下を開口し外間に注ぎ口を貼り付けるタイプと思われる。18 ~ 21 は擂鉢の口縁部で、いずれも玉縁を有し口縁部に鉄釉を施す。22・23 は擂鉢の底部。

磁器: 24 ~ 26 は青磁碗の底部で、24 は外面ケズリで高台も削り出し。全面に施釉し、内面見込みと高台に砂目が残る。26 は外面ケズリ、高台削り出しで、内面見込みの釉を輪状に焼き取っている。27 は小さな高台を削り出し、外底面以外を施釉する。27 ~ 33 は碗。27 は小碗で外表面は二次焼成を受ける。28 は「くらわんか碗」で内面見込みの釉を輪状に焼き取っている。29 は外面白地で呉須を用いて松を描く。30 も外面白地に呉須で文様を施しているが意匠不明。31 は内面白地に朱で文様を施しているが意匠不明。32 は白磁の稜花皿。33 は底部小片だが、高台部分を残すように打ち欠きがなされている。

瓦質上器: 34 ~ 36 は鉢の口縁。37 は擂鉢。38 ~ 43 は火鉢。38 ~ 41 は口縁部でいずれも内側へ口縁部を肥厚させている。42 は胴部片で菊花文のスタンプを有する。43 は底部片で胴部立ち上がり部分に脚を接合している。

P005 南側搅乱 (44 ~ 48)

P005 南側搅乱が何を指しているのか不明である為、ここに併せて記載する。44 は陶器の鉢の口縁部。45 は磁器の碗で、内外面に施釉し内面見込みを中心として外面にまで菊花を呉須で描く。高台内面には窓元を示す記号がみられる。46 は瓦質の擂鉢の口縁で、二次焼成により赤変色している。47 は鈍い黄色をした凝灰岩製の石製品である。一見すると硯や車止めに見えるが、墨を磨ったような痕跡もなく、硯み部分が浅く小さい為用途は不明。48 は鉄製の戸車。

P032 出土遺物 (49・50)

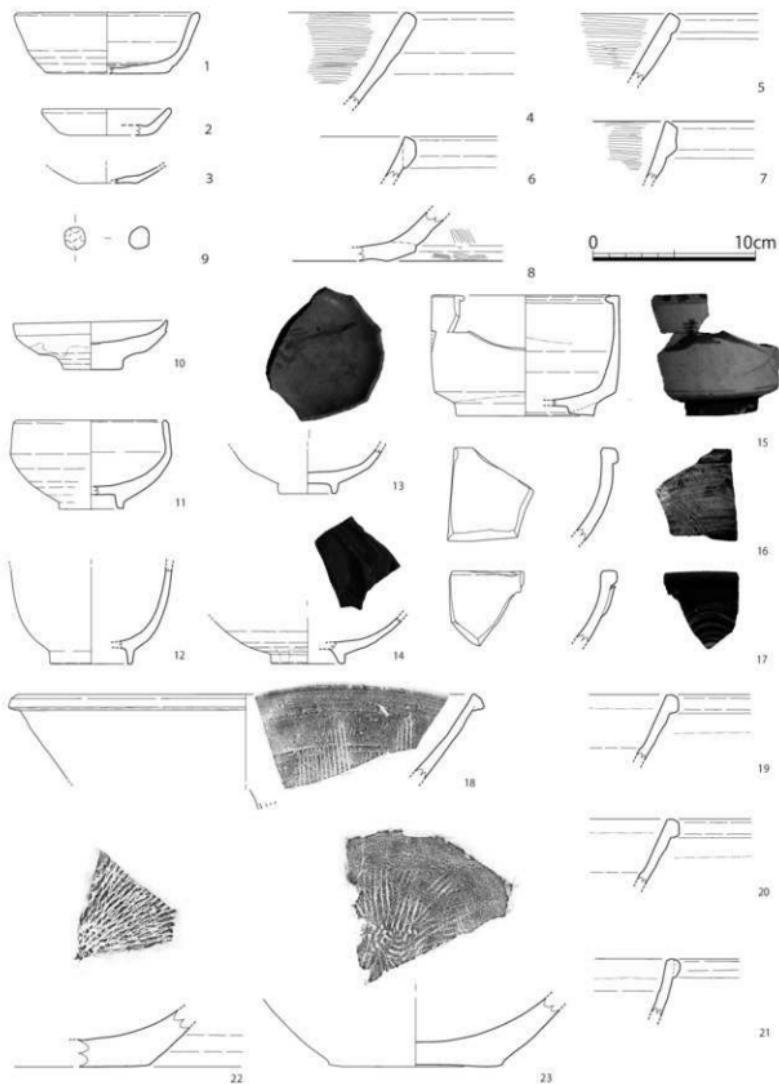


Fig. 9 柱穴列A群 出土遺物 (1) (S = 1/3)

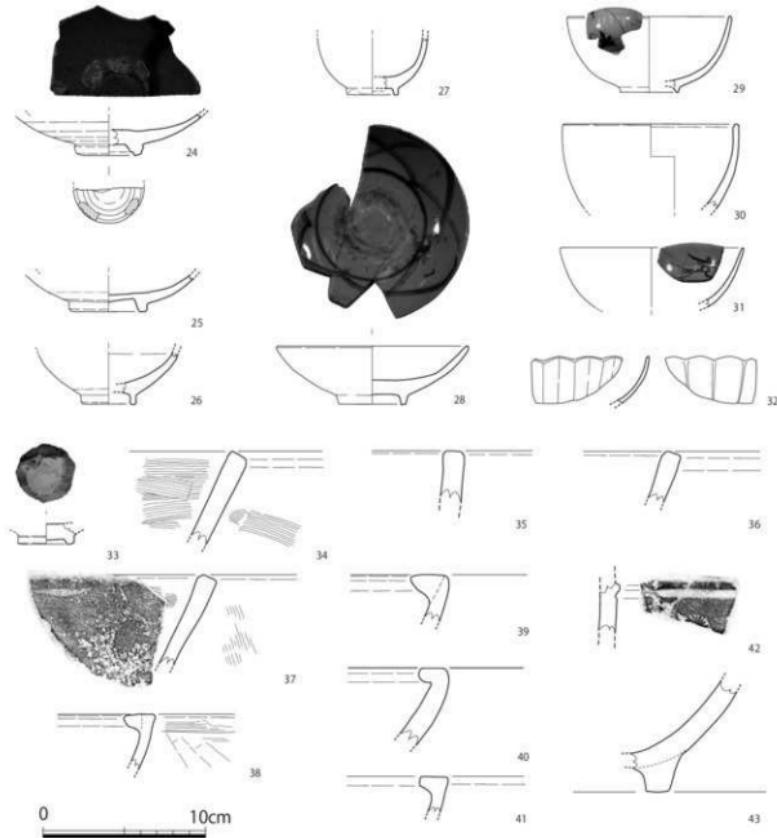


Fig.10 柱穴列A群 出土遺物 (2) ($S = 1/3$)

49は土師皿の底部。50は土師器の壺の口縁部である。

P033 出土遺物 (51)

51は土師器の小皿。

P064 出土遺物 (52~57)

52は土師の大甕の口縁部と底部。53は陶器の大鉢で、内面見込みに8条の線で円を描き、砂目跡が残る。54は磁器の碗で、全面施釉。高台に砂目跡が残る。55・56は凝灰岩製の砥石でいずれも土草産。55は3面を利用している。56は1面を使用し被熱により赤色化している。57は砂岩製の凹み石。

P077 出土遺物 (58)

58は陶器の鉢である。

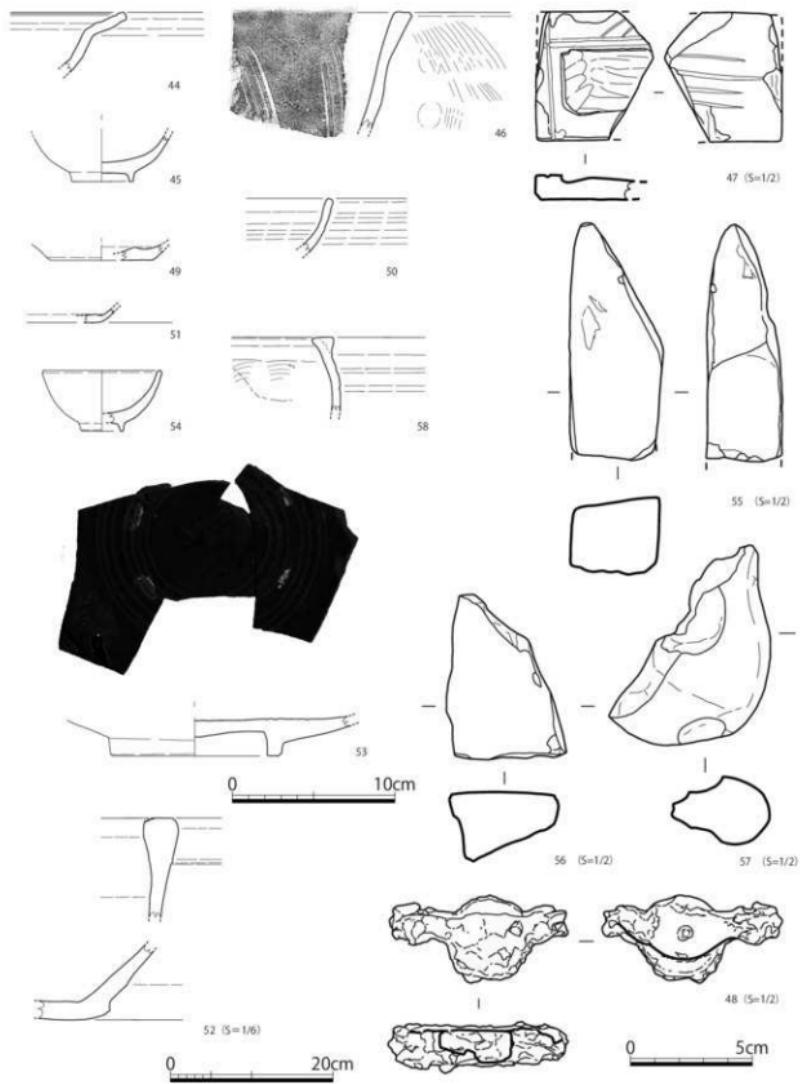


Fig.11 柱穴列A群 出土遺物 (3) ($S = 1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/6$)

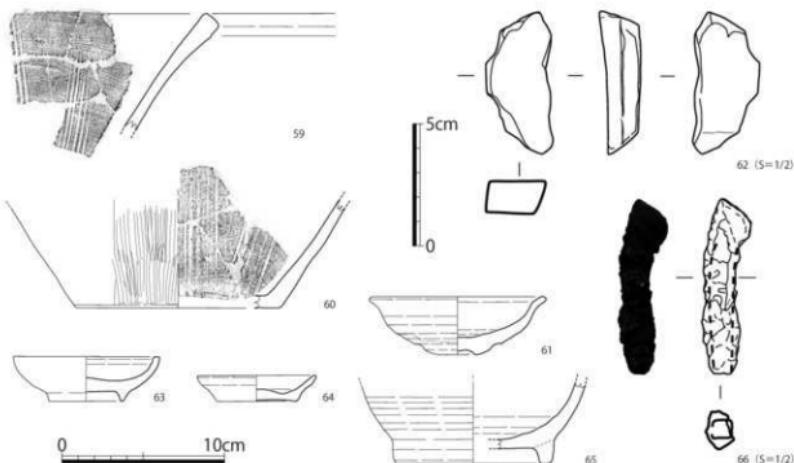


Fig 12 柱穴列 B・C 群 出土遺物 (S = 1/2・1/3)

柱穴列 B 出土遺物

P081 出土遺物 (59・60)

59・60 は瓦質の擂鉢。

P079 出土遺物 (61・62)

61 は陶器の碗で高台削り出しで露胎。62 は用途不明の石製品。

柱穴列 C 出土遺物

P087 出土遺物 (63)

63 は碗としてあげているが、蓋となる可能性もある。外面は施釉し朱で絵付けを施し内面は露胎。

P137 出土遺物 (64)

64 は土師器の小皿。

P136 出土遺物 (65)

65 は陶器の瓶で、高台を有し外面に鉄釉を施す。

P166 出土遺物 (66)

66 は断面方形の鉄釘。

SE100 出土遺物 (67～251)

土師製品：67～75 は土鍋で、いずれも口縁部を肥厚させている。76 は鉢。77～78 は火鉢と思われる。77 は口縁を内側に折り曲げ、直下に方形や花模様のスタンプを施す。78 は底部を大きく開口し、内面開口部直上に受け部を設ける。また外面開口部直上には「博多」とスタンプを施している。79 は方形の土師製品で一面を開口する。炬鍵か。80・81 は盆状の土師製品。82 は鉢。83 は 82 に形状は近いが内面に煤が認め

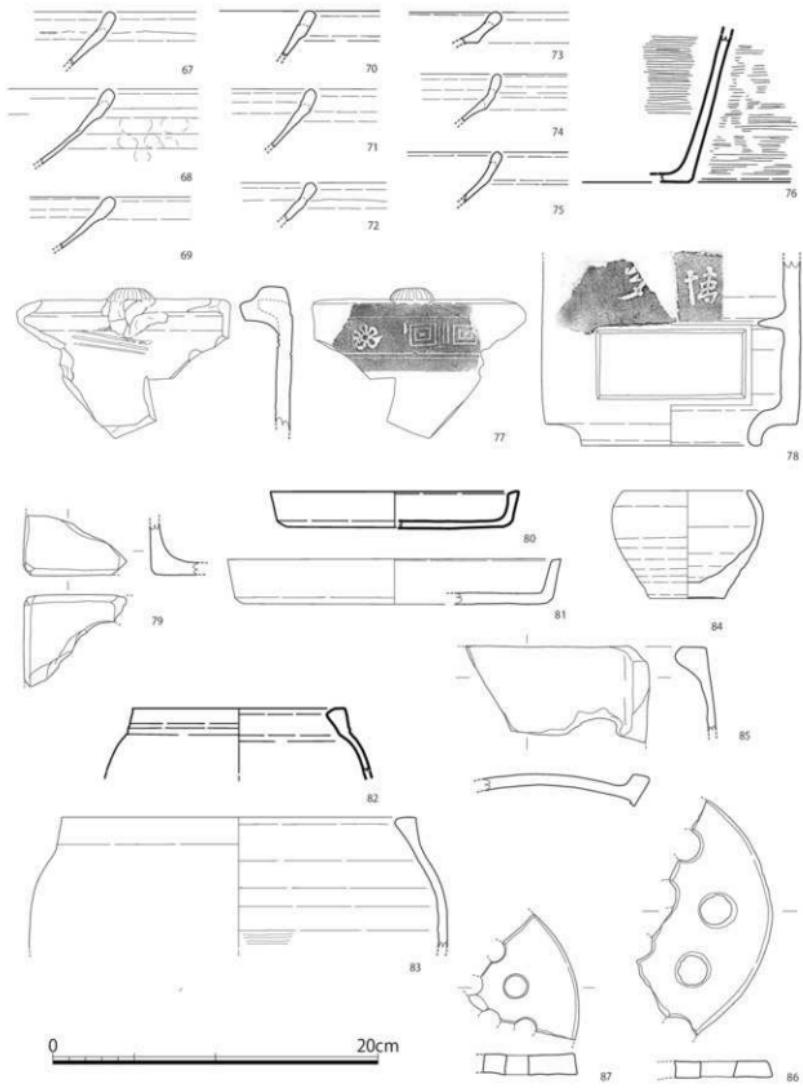


Fig.13 SE100 出土遺物 (1) (S = 1/3)

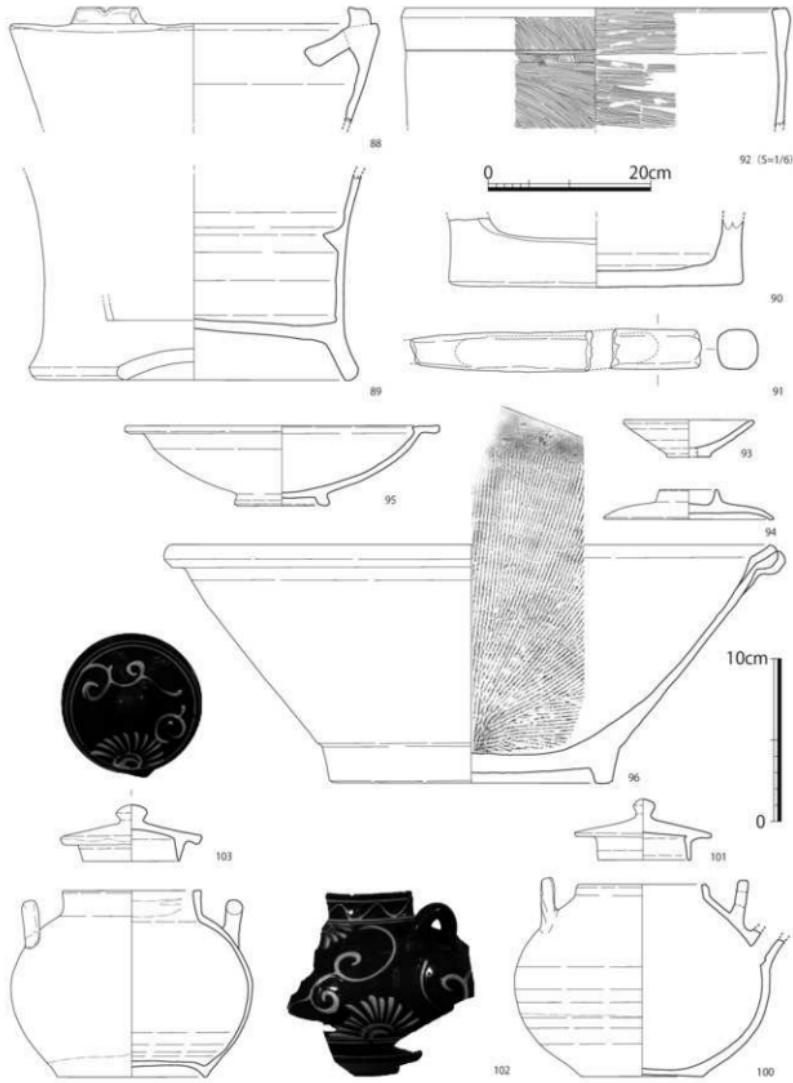


Fig.14 SE100 出土遺物 (2) ($S = 1/3 \cdot 1/6$)

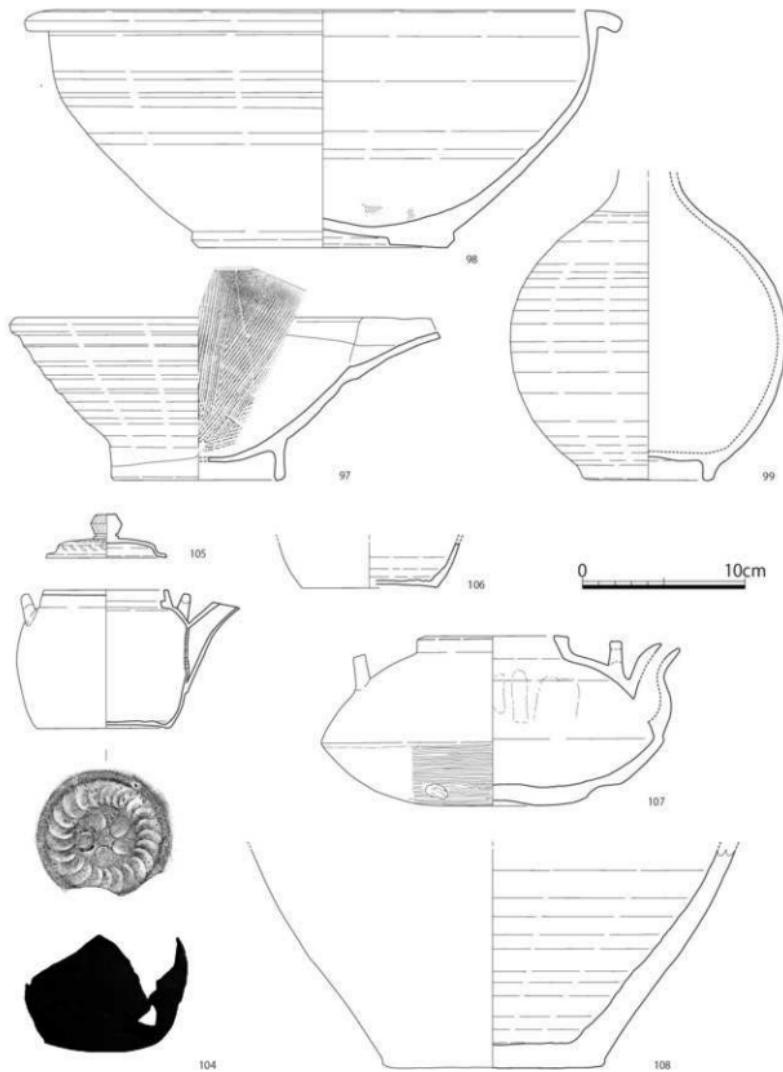


Fig.15 SE100 出土遺物 (3) ($S = 1/3 \cdot 1/6$)

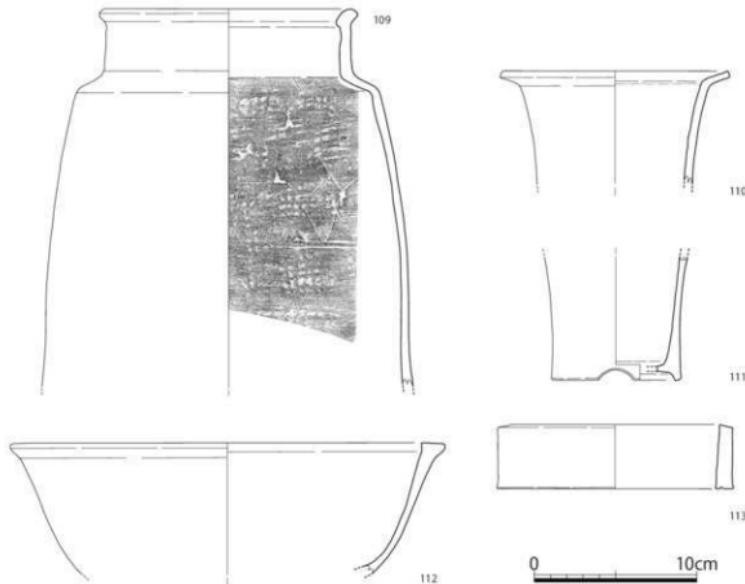


Fig.16 SE100 出土遺物 (4) ($S = 1/3 \cdot 1/6$)

られる。手あぶりか。84は火入れ。85は風炉か。86・87はサナである。88～90は焜爐もしくは七輪で88は上部に3本の受けを設けている。91は棒状製品。92は大甕の口縁部である。

陶器：93は壺。94は蓋。95は浅鉢で内面に施釉、二次焼成を受けている。96・97は片口で、96はほぼ擂鉢だから口の部分を弱く外反する。98はこね鉢で内面見込みに7個の重ね焼の目跡が残る。99は瓶。100・101は大型急須とその蓋。102・103は急須とその蓋。緑色釉の素地に白色で菊水を描く。104・105は型押しの急須とその蓋。106は朱泥の急須。107は陶製の薬缶で、上部はSE100、下部はSK070から出土。108は甕の底部で内面に重ね焼の目跡がある。109は細長の甕。110・111は陶製の小型植木鉢。112は大型の植木鉢。113は用途不明の輪状製品である。

磁器：114～131は碗でほぼプリントである。114は「くらわんか碗」で内面見込みの軸を輪状に搔き取る。115は外外面に絵付をしているが意匠不明。116は藤と蝶。内面見込みの軸を輪状に搔き取る。117は藤。内面見込みの軸を輪状に搔き取る。118は朝顔。内面見込みの軸を輪状に搔き取る。119は竹と菊。内面見込みの軸を輪状に搔き取る。120は牡丹か。内面見込みには菊を施す。121は扇子に富士・鷹の羽根・茄子。内面見込みには草花文を施す。122は童子。123は松竹梅。124は扇子に美人画。125は鶴で同意匠の色違いも認められる。126は梅に鶯。127は扇子。128は扇子で高台直上の体部に6箇所の丸刃で施したような面取りがある。129は口縁部に軸部分的に施し、高台直上の体部に7箇所の面取りを行う。130は中型の碗で内外面に植物、口縁部が外反する。131は大型の碗で外面には泡状の文様、見込み部分にも文様を施すが意匠不明。

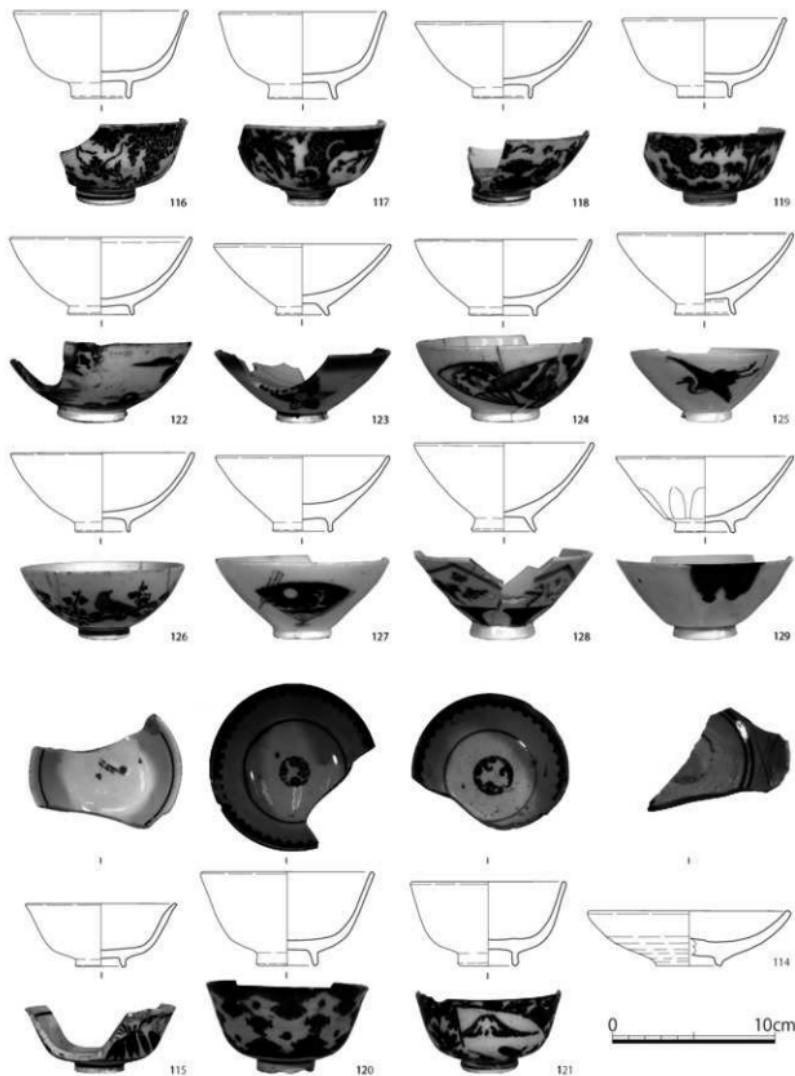


Fig.17 SE100 出土遺物 (5) (S = 1/3)

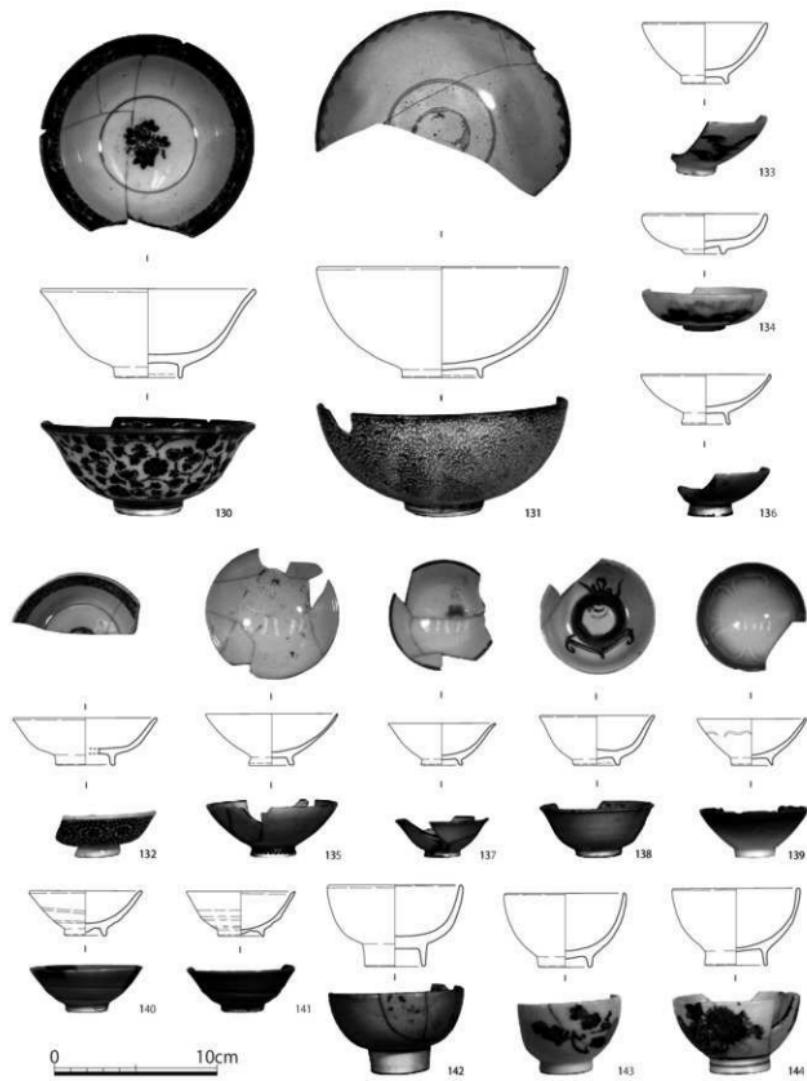


Fig.18 SE100 出土遺物 (6) ($S = 1/3$)

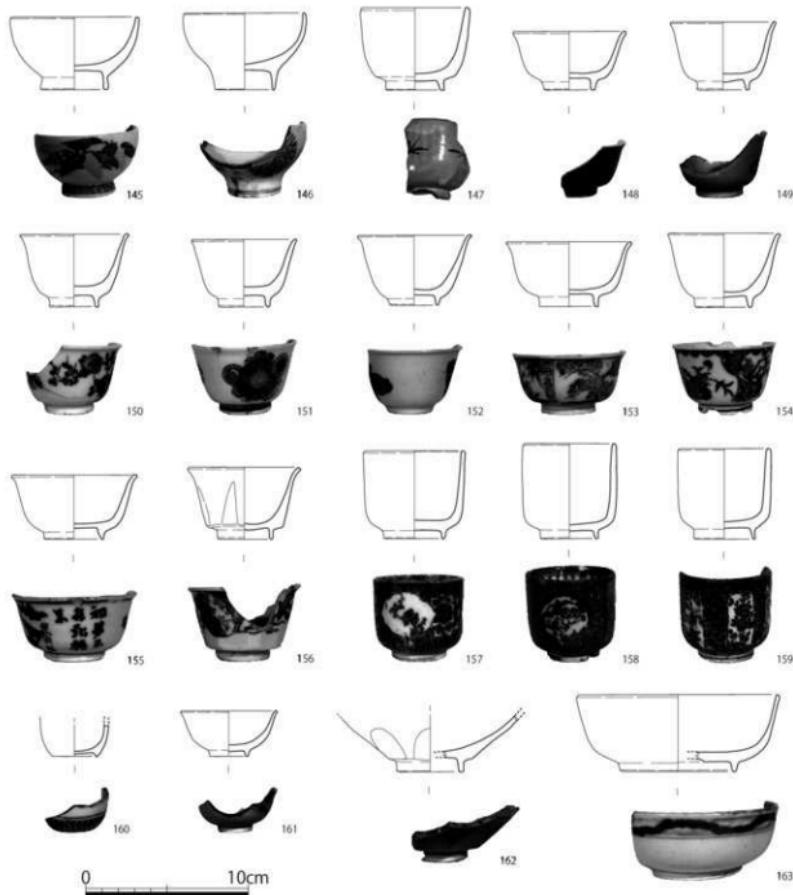


Fig.19 SE100 出土遺物 (7) ($S = 1/3$)

132～146は壺ではぼプリントである。132は染付で外面蛸唐草。133は染付けで外面に木(松)か。134は草花文。135は内面に菊の紋と日の丸・日章旗、「念」「陸軍」「山口」と金彩されている。136は内面に金彩の痕跡を残す。137は口縁部に朱を施し内面に「炭販」と金彩する。138は内面見込みを輪状に掻き取るがここにコバルトを施し、宝物の文様としている。139は外側から押し出すことで内面に込みに5弁の花びらを浮き上がらせている。140は青磁の壺で外面に沈線で渦巻きを施しており、口縁部に褐色釉を3箇所施している。141は青磁壺で1条の沈線で渦巻きを施しているが口縁部に別色の釉は施していない。142は白磁の壺。143は菊花に「千代」の銘。144は菊花。145は栗の花か。146は円形の樹枝状の文様。

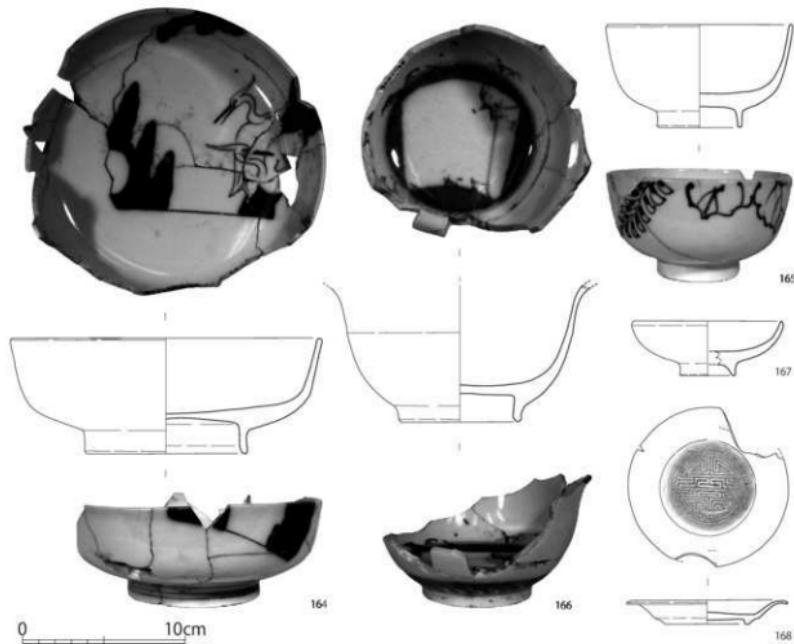


Fig.20 SE100 出土遺物 (8) (S = 1/3)

147～156は呑飲でほぼプリントである。147は染付で草を描く。148は口縁部が外反し、外面に濃緑色の釉を施す。149は口縁部が外反し、外面に淡緑釉を施し草花を描く。150は梅。口縁部が外反する。151・152は共に花。口縁部が外反する。153は「福禄寿」の文字に区画された中に松竹梅。口縁部が外反する。154は松竹梅に牡丹。口縁部が外反する。155は「初夢三□□福来 莫山」と銘があり。富士と茄子を描く。口縁部は外反。156はネズミに打ち出の小鉢。胸部の6箇所を平坦に面取りし、口縁部は外反。

157～159は湯飲すべてプリント。157は牡丹を背景に区画部分に梅と思われる植物。158は猪か。159は区画に草花を描く。

160は染付けの猪口。161は果物籠を描く。コバルトが盛り上がり印判か。口縁部は弱く外反。

162は白磁の小鉢で高台直上を面取りしている。

163は染付けの浅鉢で、内外面の口縁直下に山を思わせる図柄を描く。164はプリントの大型浅鉢で、内面に鷺を描き、高台内に窯元の印を有する。

165は鉢で染付けで白磁に藤をコバルトで描く。166は深めの鉢で内面見込みに紙。口縁部は外反。底部外面に砂目跡が1箇所認められる。透明釉により判然としないが染付けか。

167～187は皿で、文様はほぼプリントである。167は白磁で青白色釉を施すが二次焼成を受け白濁。168は白磁で口縁部が外反し、内面見込みに双喜文を陰刻する。169は青磁で庭の景色をプリント。高台は

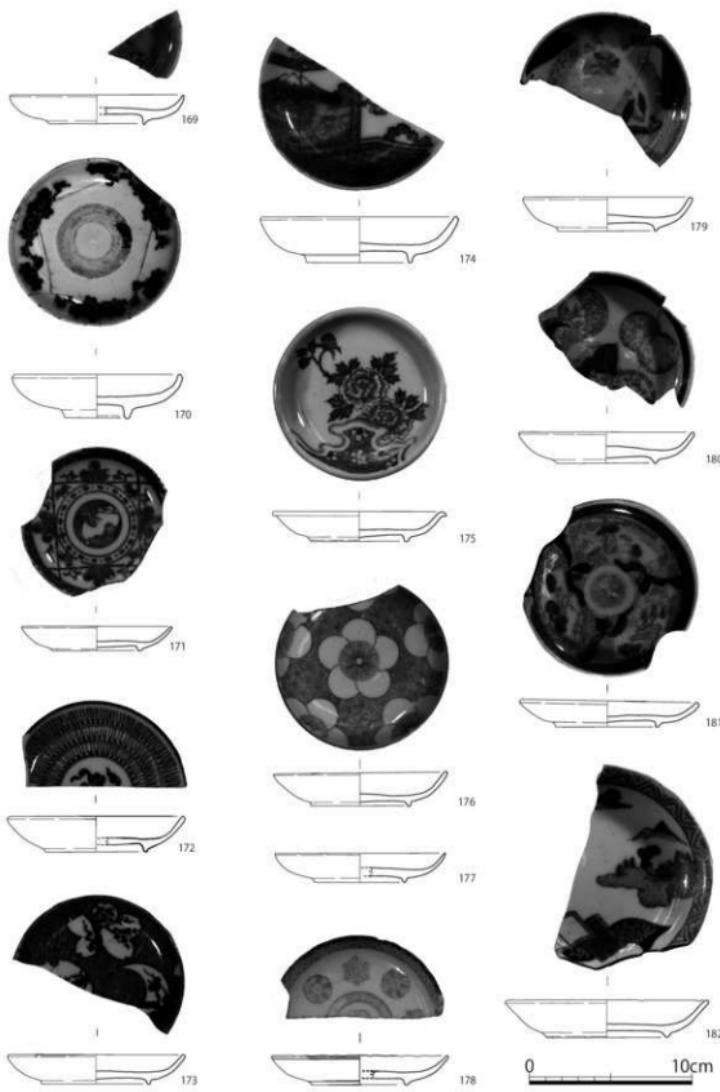


Fig.21 SE100 出土遺物 (9) ($S = 1/3$)

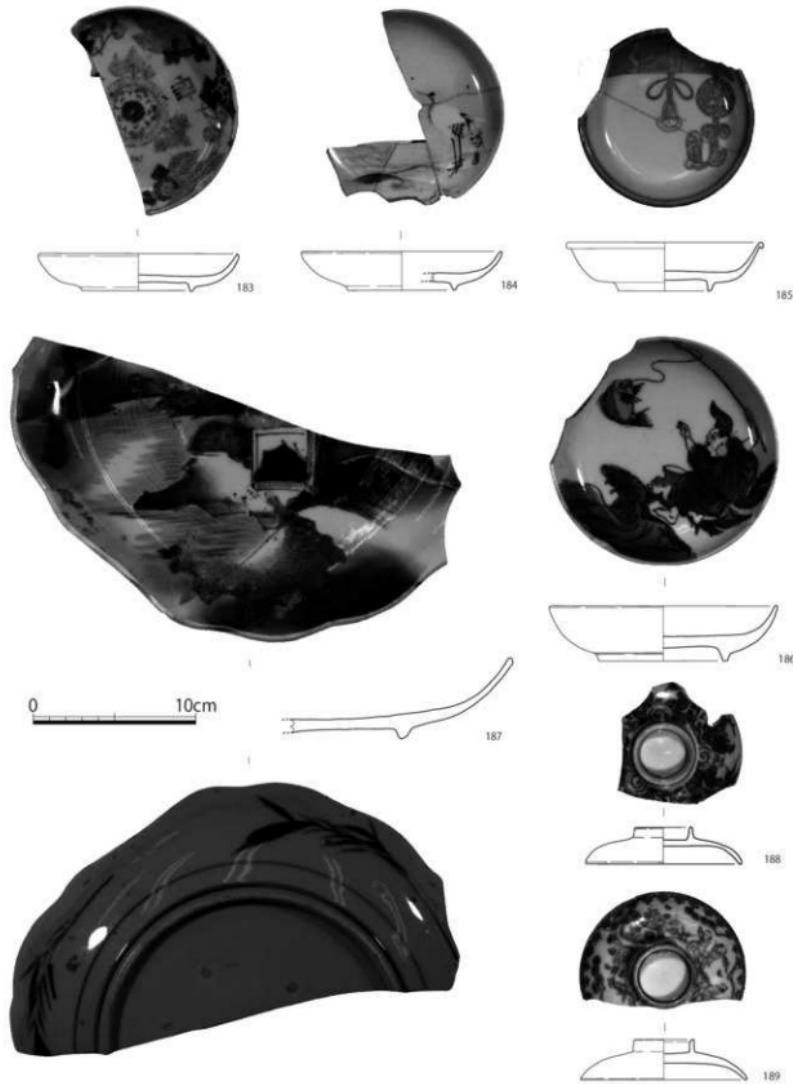


Fig.22 SE100 出土遺物 (10) ($S = 1/3$)

削り出し。170は菊花。内面見込みの釉薬を円形に搔き取る。

171は中央に鶴亀。その周囲に植物を描く。高台削り出し。

172は見込みに宝(芭蕉か)。口縁部は褐色釉。高台削り出し。

173は月・牡丹?・桜の区画に松竹梅。同様の图案で口縁部に褐色釉を施したものもある。高台削り出し。174は山の屏風に梅。高台削り出し。175は白磁に牡丹の緑色プリント。下地の白色釉はムラが見られる。口縁部は外側に折り曲げ、高台削り出し。176は梅花の緑色プリントで口縁部に褐色釉を施す。高台削り出し。177は176と意匠はほぼ同じだが梅花が二重。釉薬は均等に仕上がってない。

178は稜花皿だが波状に細かい。内面は金で花を、外面はコバルトで線を描き、口縁部は褐色釉を施す。高台削り出し。179は赤で「三十六歌仙」を描き一部ベンガラとコバルトで彩色。高台削り出し。180は赤で「商法強」「陶器盛大」と書かれ一部ベンガラで彩色。高台削り出し。181は赤で見込みに双鳥文、周囲に風景や松を配し、赤・青・黄色・緑で彩色する。高台削り出し。182は金で書物、家屋、鶴を描き、赤・青・紫?で彩色。外面には植物を描き緑・紫で着色する。口縁部は弱い稜花皿となっている。183は赤で桐・葵などの草花文を描き、赤・青・黄・緑・黒で彩色する。高台削り出し。184は白磁に淡い青を乗せた素地に、赤と黒、素地の青を搔き取ることで岸にたたずむ丹頂鶴を描き、「梅山」の銘がある。高台削り出し。185は口縁を外側に折り曲げ御簾を縁でプリント、口縁部及び外面はコバルト、御簾にかかる房には赤で彩色する。186は緑で鯉を釣る恵比寿を描き青・ピンクで彩色する。187は大型の稜花皿で、コバルトで内面に湖水図、外面には草を描く。高台内部には重ね焼の目跡が3箇所残る。

188は碗の蓋で、表面に3対のオシリドリをプリント。内面には砂目跡が残る。189は碗の蓋で草花の中に遊ぶ唐子をプリント。190は合子の蓋で、表面は半円状の文様で覆い、内面には「松尾□」の銘が陰刻されている。191は壺の蓋で上面に1対の果実を描く。

192～196は徳利。192は口縁部に日の丸と日章旗、肩部には日の丸・日章旗・海軍旗を押し立てた町並みに「戦捷□念」の銘。底部には万国旗が描かれている。193は肩部の区画内に松竹梅を配し、底部には植物を描く。194は口縁部に文様があるも意匠不明。胴部には吉祥句で区画された中に松竹梅、底部には植物?の文様を描く。195は底部片で、底面に「軒山精製」の銘。196は底部片で花と手縫?を描く。かなりの上げ底。

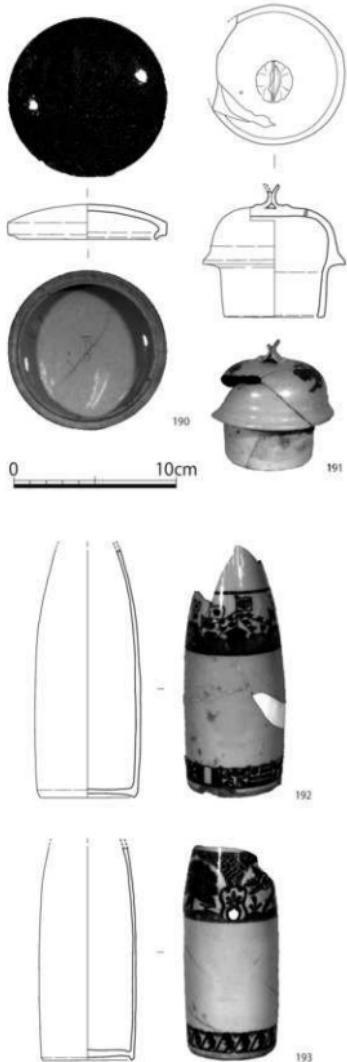


Fig.23 SE100 出土遺物 (11) (S = 1/3)

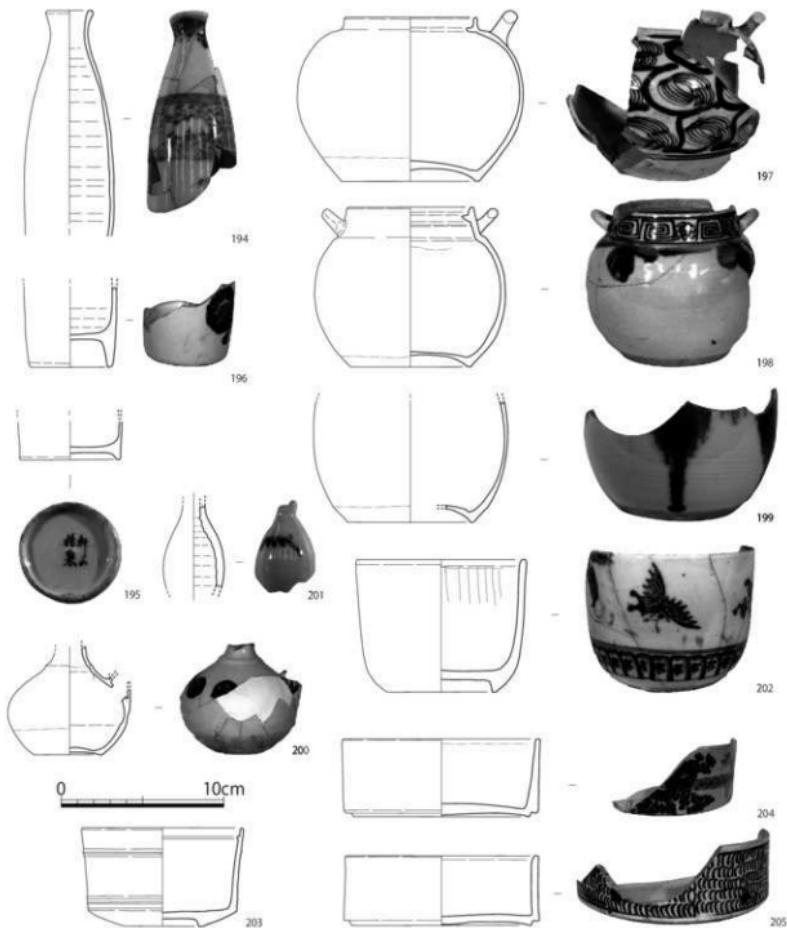


Fig.24 SE100 出土遺物 (12) (S = 1/3)

197～199は急須。197は外底面露胎。全面に雲氣を描く。198は外底面および口縁内部が露胎。口縁部に雷文を描き、肩部には褐色釉を施す。199は外底面露胎。肩部にコバルトでラインを施し体部には明褐色の釉薬を垂らす。

200は醤油押しか。外底面露胎。粘性の強い白色釉の素地にコバルトで円を施す。

201は小型の瓶。白色釉にコバルトで笹を描く。内面は工具の段差が大きく残る。

202・203は合子。202は梅と蝶をプリント。底部に砂目が残る。203は体部上段と下端に突帯を施しそ

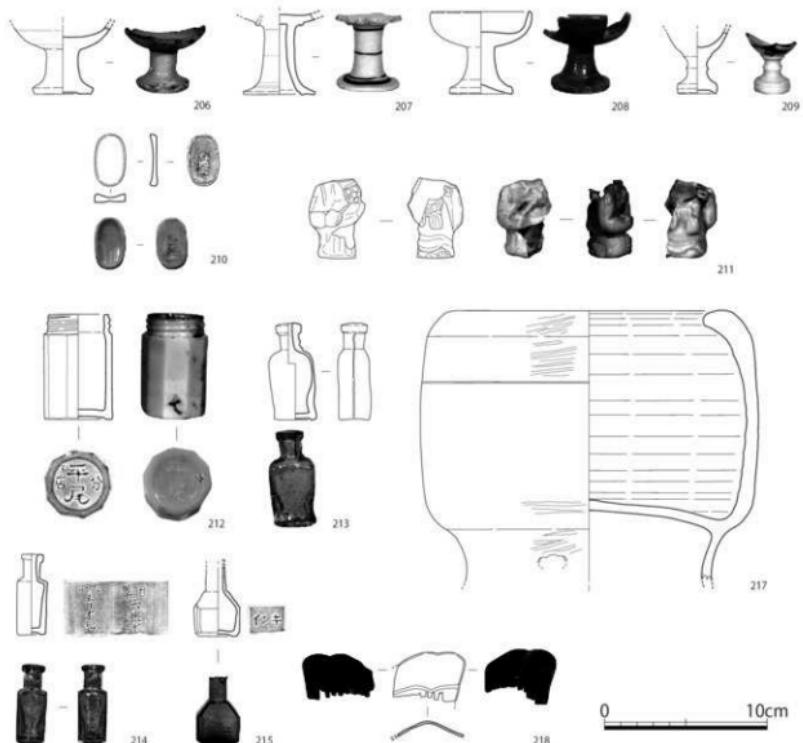


Fig.25 SE100 出土遺物 (13) (S = 1/3)

の間に蝶と思われる图像を描く。内部見込みの釉を輪状に掻き取り、外底面に砂目が残る。

204・205は段重。204は縁で竹、青で菊をプリント。205はコバルトで鱗状の模様を描く。

206～209は仏壇具。206は灰色釉に兜須で文様を描く。207は白色釉に赤で模様を描く。器部分の下には重ね焼の跡が残る。208は全体に柿色の釉を施す。209は小型品で、白色釉の上にコバルトで模様を描くも意匠不明。

210は白磁の牌。裏面は露胎で「龍光堂」と陰刻されている。

211は白磁の人形で一部に赤・黄色・緑の彩色が残る。また体側面に小さな穴が確認できる。焼成はよくなく、足元の接合部分で割れが生じている。手に花のようなものを持つて観音像か？

瓦質土器：217は火鉢で脚部に雲状の透かしを施す。

ガラス製品：212は白濁したガラス瓶で10角形。底面には「平尾分店」の陽刻がある。213は小型の透明ガラス瓶で気泡が覆い。214は円柱型の透明ガラス瓶で、表に「目薬 天眼水」、裏面に「大阪 青木製」と陽刻している。215は方形のインク瓶で気泡が多い。表に「インキ」と陽刻する。216は淡青色のガラス

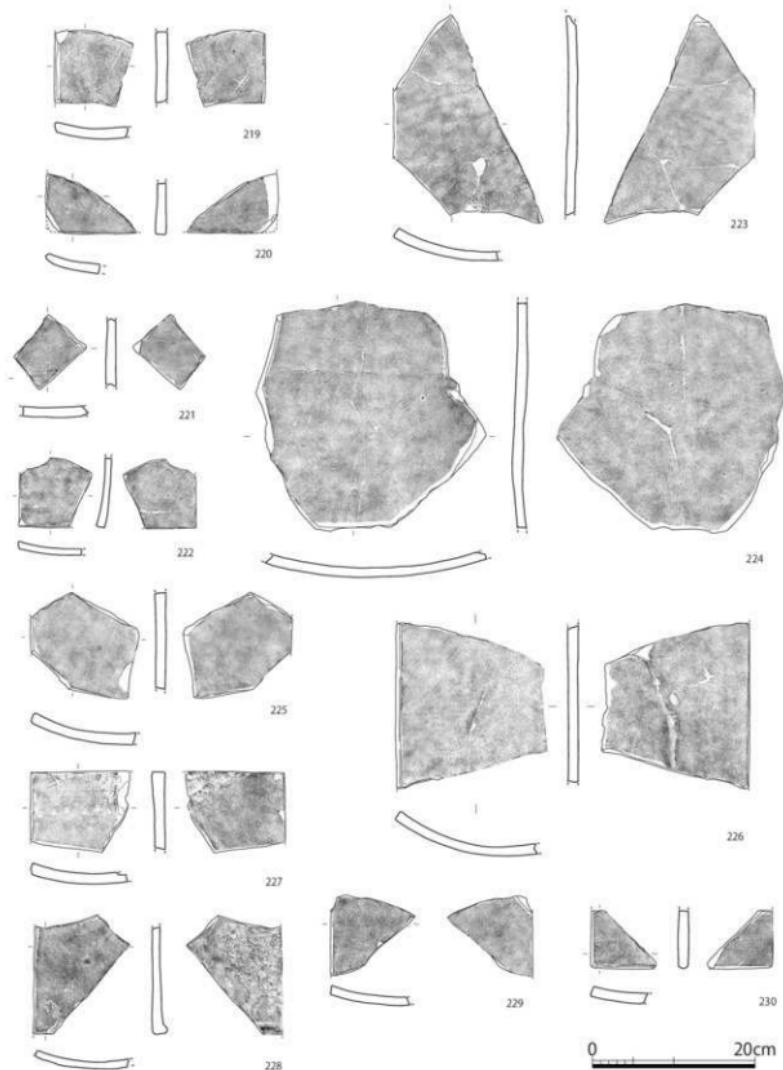


Fig.26 SE100 出土遺物 (14) (S = 1/6)

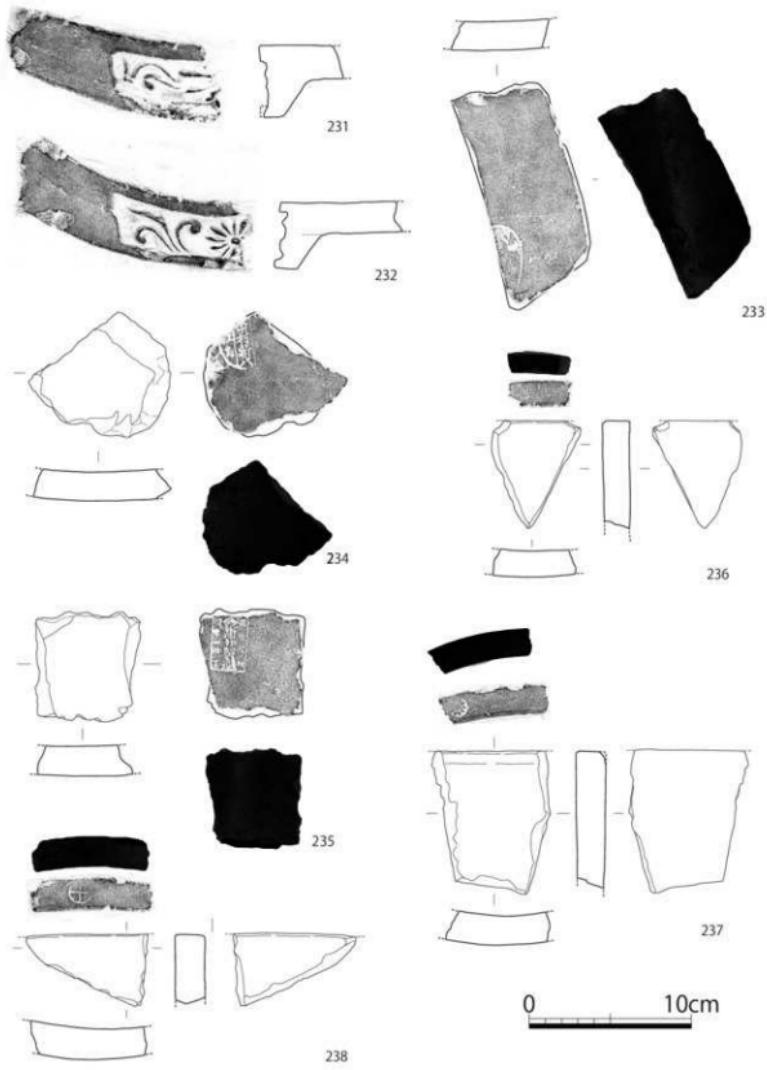


Fig.27 SE100 出土遺物 (15) ($S = 1/3$)

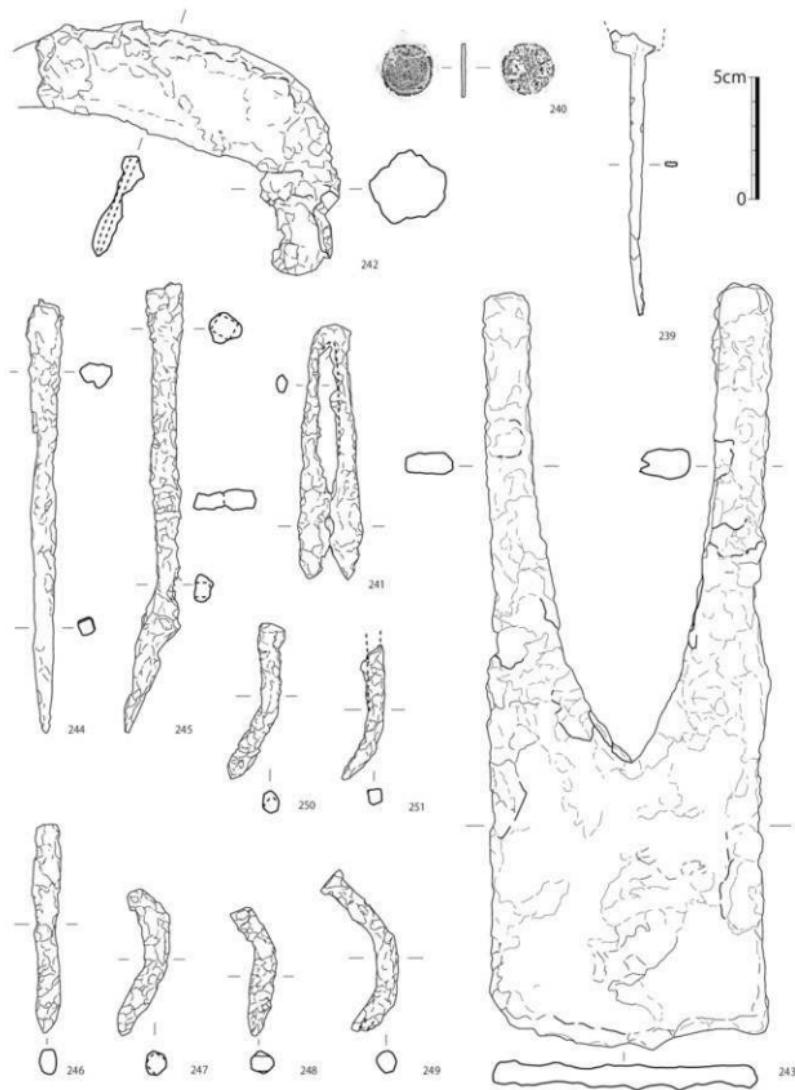


Fig.28 SE100 出土遺物 (16) ($S = 1/2$)

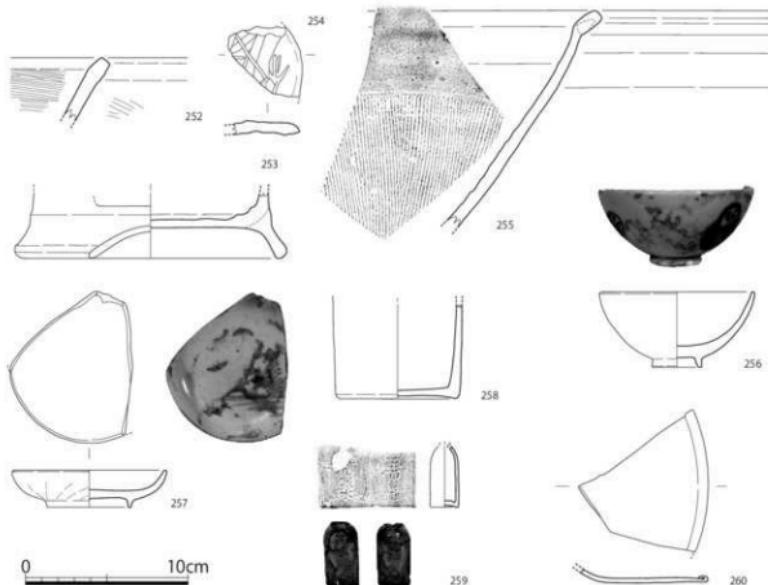


Fig.29 SE100 出土遺物 (17) (S = 1/3)

玉(ビー玉)。

べっ甲製品: 218は櫛。歯はすべて失い本体も大きくゆがんでいる。表に「城戸ヨシノ」、裏は「城」という線刻がなされている。

瓦: 219～226はナデ調整で仕上げる土師質の赤瓦。219は側面を面取り。両面に叩き痕が認められる。221は裏面に弱く工具痕が残る。224は裏面に工具痕が残る。227～230はハケ目で仕上げた土師質の赤瓦。227は前面を肥厚。228は前面に粘土帯を貼り付け鉢状の形態となる。231～238は瓦質の瓦である。231は桟瓦の軒平瓦で草花文を陽刻。232は軒平瓦で草花文を陽刻。233は裏面に「城島□ 製□□…」と銘印を印刻する。234は裏面に「…中村新八 … (江)島」と銘印を陰刻する。235も銘印を印刻するも残りが良くなく、文末の「…拾丁」しか判読できない。236は側面に銘印を持つも左読みで「製富□□…」としか判読できない。237は側面に菊花文のスタンプ、238は側面に丸十字のスタンプを印刻する。

銅製品: 239は笄で、二箇所で大きく屈曲している。240は明治39年(1906)発行の半錢銅貨。全体に痛みがひどく、裏面にいたっては全く判読不能。

鉄製品: 241は鉄(糸切り鉄)でほぼ完形。242は鎌で先端を欠損。装着部分の木材は朽ちて楔や留め金具などが銷により結合している。243は鎌で、刃部に欠損がある。244・245は共に断面方形で同じ長さを持つ。鉄杭もしくは火箸の可能性がある。246～251は鉄釘である。

P095 出土遺物 (252～260)

P095はSE100の南側に位置し、これに切られている。遺物にはSE100出土品と接合するものや同じ製品が含まれており、ここに併せて報告する。



261



10cm



263

0



264

土師製品：252は土鍋で口縁部は僅かに外反し、外側へ肥厚する。
253は七輪もしくは焜爐の底部。254は肩部破片。

陶器：255は擂鉢。口縁部は外反、折り曲げて肥厚させる。

磁器：256は碗で、外面に赤・緑・黒・金の絵の具でだらまを描く。
257は皿。粘性の強い白濁釉を全面に施し、内面に花と蝶をコバルトで描く。258は白磁の徳利で、底部露胎。

ガラス製品：259は目薬の瓶で、「光眼水」「藤田製剤」と陽刻されている。260は円盤状の製品。真ん中程から中央部に向かって反り返り、端部は折り曲げている。用途は不明。

SE110 出土遺物 (261)

261は陶器の皿。内面および外面上部に白灰色釉を施す。内面に砂目跡が2つ残る。

(S = 1/3)

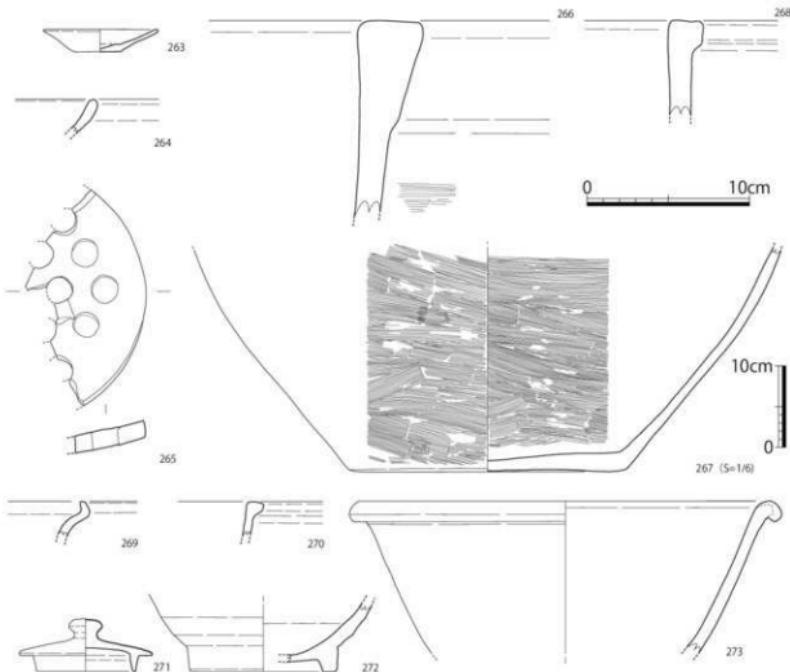


Fig.31 SK030 出土遺物 (1) (S = 1/3 • 1/6)

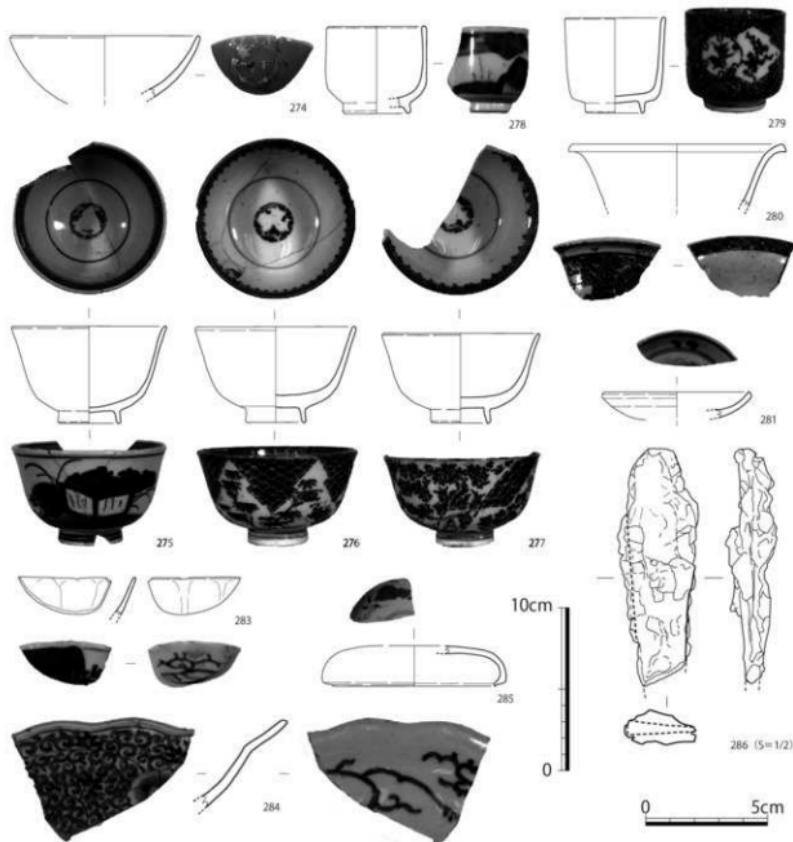


Fig.32 SK030 出土遺物 (2) ($S = 1/3 \cdot 1/2$)

SK105 出土遺物 (262)

262は磁器の皿。全面に白色釉を施し、一部を赤銅色の釉に浸す。内面に鳥を印刻し、コバルトで彩色する。

SK030 出土遺物 (263 ~ 286)

土師製品：263は小皿。264は土鍋の口縁部で素口縁タイプだが、口唇部の粘土接合の外側を丁寧に仕上げないことで沈線をめぐらせたように見せている。265はサナで、断面が皿状となり上方から穿孔する。266は大甕の口縁部で、外側に粘土帯を貼り付けることで口縁部を肥厚させる。267は大甕の底部で埋甕の本体である。268は平瓦。

陶器：269は壺の口縁部破片。270は楕木鉢の口縁部で、垂直に伸び、褐色釉の上に白色釉を施す。273

は大型の植木鉢の口縁で、上方に大きく開いている。271は鉢の底部。内面露胎。植木鉢か。272は蓋、外面は緑色釉を施し内面露胎。

磁器：274～277は碗。274は内面は白色釉、外面に明緑色釉を施した後に粘性の強い白色釉で文様を浮き上がらせるように描く。275は口縁部外反し、外面には書物と草花、内面には雷文を呉須で描く。276は口縁部外反、外面に草花文と青海波文をプリントする。277は口縁部外反、外面に草花文をプリントする。278は呑飲で外面に山水を呉須で描く。279は湯飲で外面に牡丹、区画内に梅などをプリントする。280は鉢で、外面に花をプリントする。281は皿。281は内面見込みの釉を掻き取り、内面にコバルトで文様を描く。282は方形の皿で内面に呉須で風景画を描く。283は稜花皿で内外面に呉須で文様を描くも意匠不明。284は大型の稜花皿。外面に雲、内面には花を描く。285は合子の蓋。外面に文様を描くも意匠不明。

鉄施品：286は刀子（包丁か）。茎から約8cmほどが残る。

SK070 出土遺物（287～328）

上師製品：287～289は小皿で、287・288は口縁部に油煙が見られる。灯明皿か。290は手あぶりか。内面上部に煤が沈着。291は風炉で外面ミガキ。292は方形の風炉もしくは炬燵で底面ナデ、外面ミガキ。293は大型の植木鉢で口縁部外反。294は水田人形で寿杯を抱えた大黒像か。295は水田人形で提灯を下げた手である。

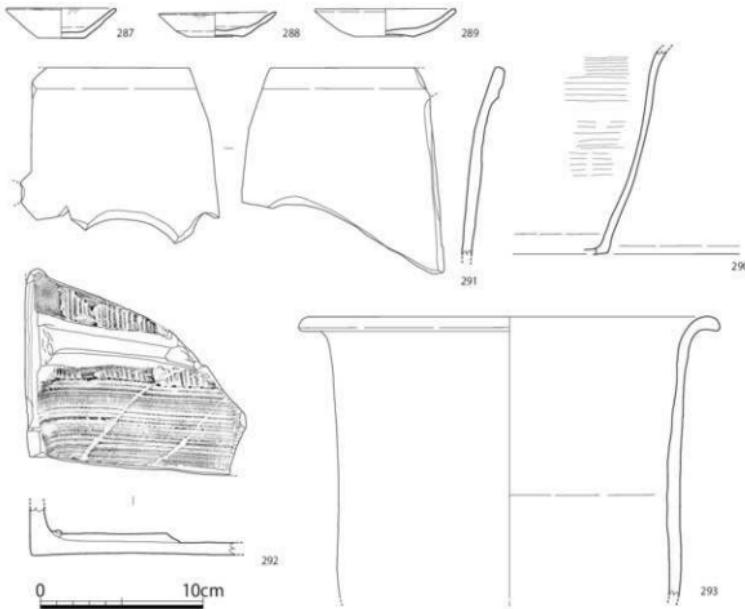


Fig.33 SK070 出土遺物（1）（S = 1/3）

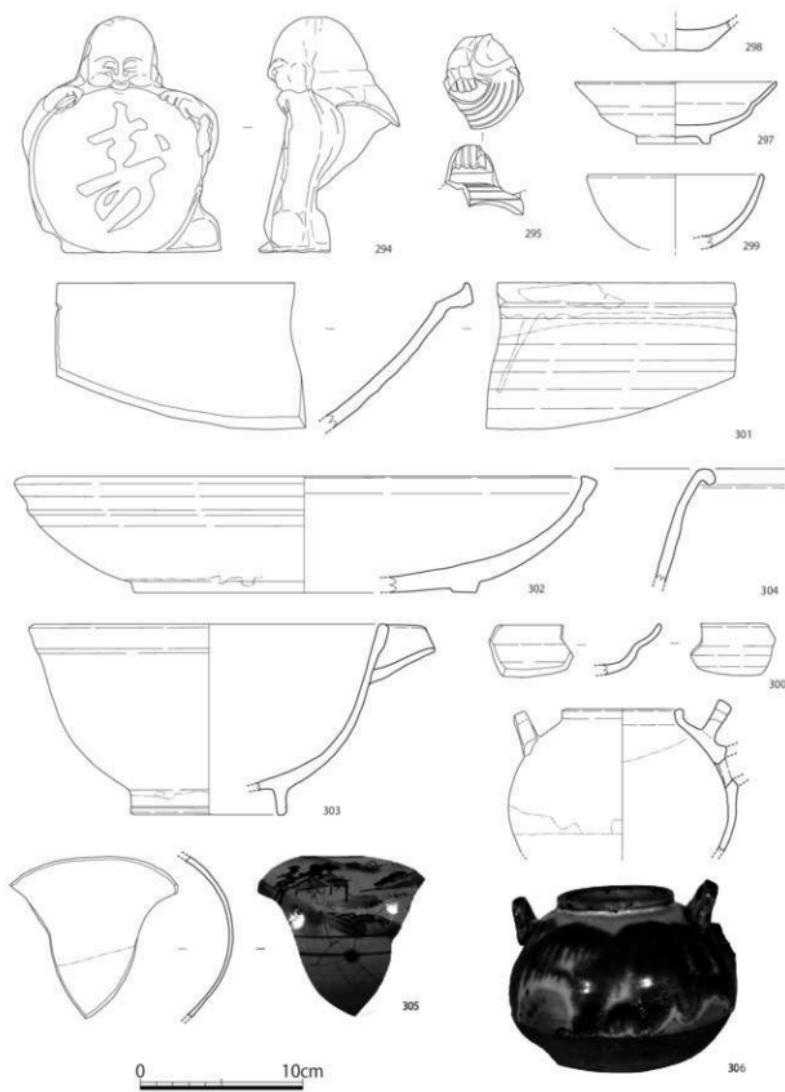


Fig.34 SK070 出土遺物 (2) (S = 1/3)

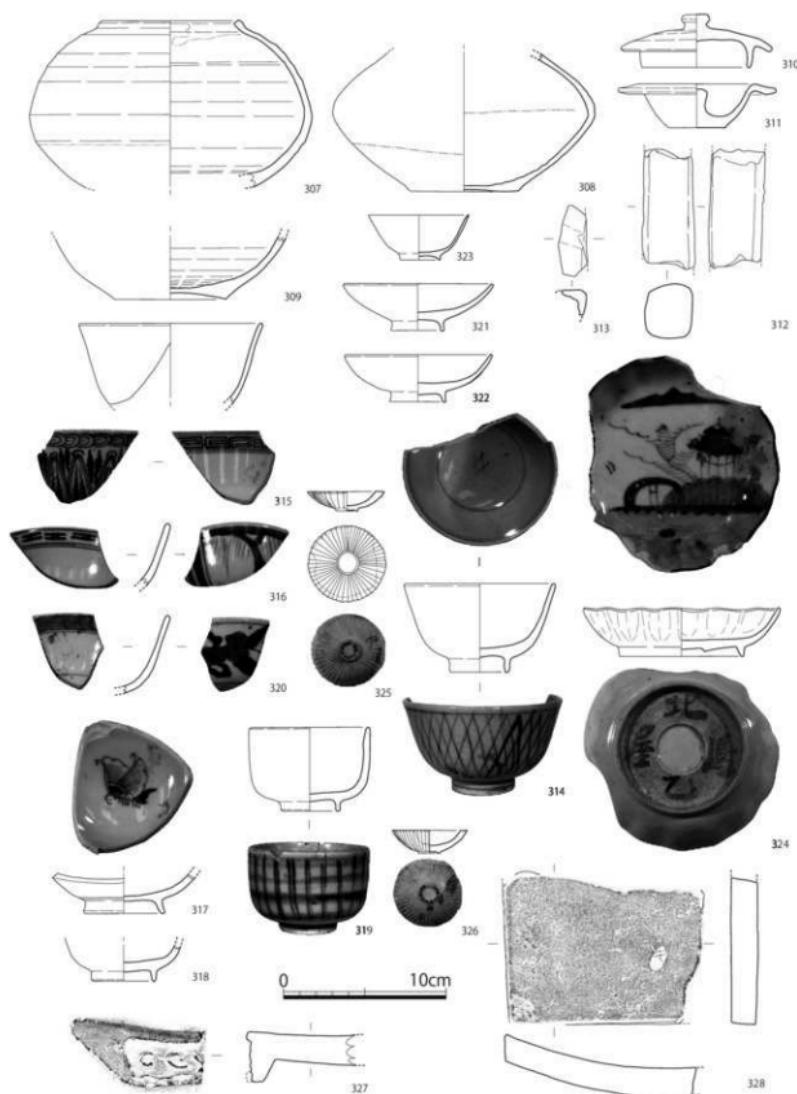


Fig.35 SK070 出土遺物 (3) (S = 1/3)

陶器：297は壺。高台以外にアメ釉を施し内面見込みの釉を輪状に搔き取る。298は壺の底部か。重量があるため徳利なども考慮すべきかもしれない。299は碗。全体にアメ釉を施す。何らかの影響で器表面に粘性が出ており。300は小鉢。全体に透明釉を施し緑色釉をポイント的に垂らす。301はこね鉢。内面に白色釉で文様を描き、口縁部から緑色釉を垂れ流している。302は大型の浅鉢。高台部分露胎。内面見込みに砂目跡が残る。303は内面に描り目を持たない片口で、高台露胎。304は植木鉢で口縁部を折り曲げている。305は壺の胸部破片。器壁は薄く、内面下半にアメ色釉。外面は上半に農村を描き、下半は露胎。306は急須で、底部と注ぎ口を欠損。内面アメ色釉、外面は上半部に白色釉・緑色釉を施している。307～309は瓶の破片で、いずれも急須になると思われる。307は胸部が大きく張り出し、外面上半に褐色釉を施す。308は胸部が大きく張り出し、内面アメ色釉、外面上部に白色釉を施し、下部は露胎。309は内面アメ色釉、外面露胎。310・311は蓋。310は外面褐色釉、内面は露胎で煤の付着が多い。311はつまみ部分が大きく沈み込む形。外面はアメ色釉を施し内面露胎。312・313は棒状製品。共に二次焼成を受けており、かまどなどで使った製品の一部か。

磁器：314～317は碗。314は灰色の素地。外面に呉須で網目を描き透明釉を全面に施す。高台には砂目が付着。315は内面に雷門、外面に雲氣などを描く。316は外面に柳のような樹木を描く。317は内面見込

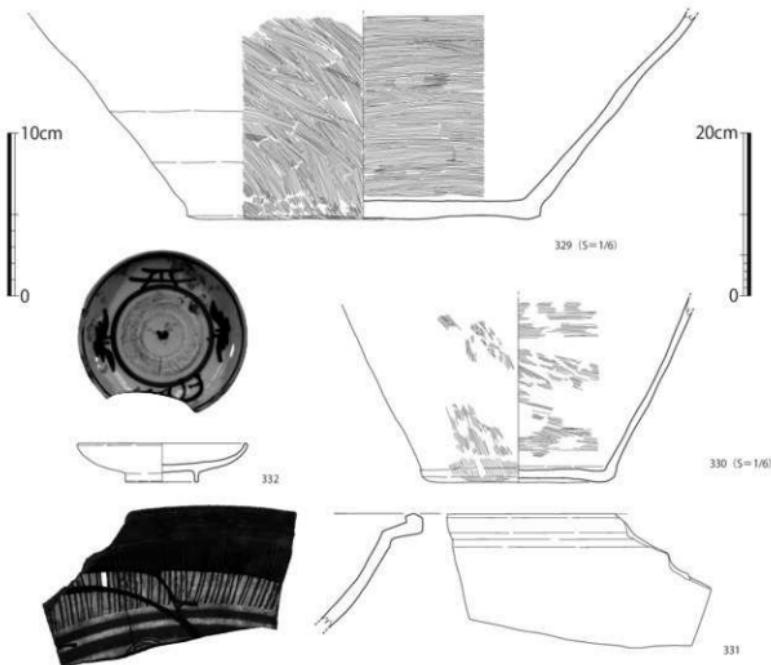


Fig.36 SK170・175 出土遺物 (S = 1/6・1/3)

みに蝶を描く。318～320は湯飲み。318は白磁の底部。319は外面に格子を描く。320は外面に植物を描く。321・322は白磁の杯。323は白磁の小杯で口縁部が外反する。324は棱花皿で内面に水面に浮かぶ島影と樓閣を描く。また施釉後に高台内部を削り、高台内には「北嶋乙屋」の墨書がある。325・326は紅皿で、325には「ヤ」の墨書がある。

瓦：327は軒平瓦。328は平瓦で上面に丸にキと陽刻をスタンプしたような痕跡が認められる。

SK170 出土遺物（329）

329は土師質の大甕で全体は灰色。内外面ともにハケ目調整。

SK175 出土遺物（330～332）

330は土師質の大甕。内外面共にナデ調整だが外面の風化が著しい。331はこね鉢。内面に白色釉で文様を描き、口縁部から緑色釉を垂れ流している。301と同様の作りだが、こちらのほうが釉の風化が進んでいる。332は磁器の皿。内面にコバルトで文様を描き、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。

その他の出土遺物（296・333～390）

P001 出土遺物（333～335）

333は土師器の甕もしくは壜の口縁部。334は須恵器の杯の口縁部。335は素口縁の土鍋である。

P004 出土遺物（336～339）

336は素口縁の土鍋の口縁で、外面に煤が付着する。337は土鍋の底部。この二つは胎土や焼成が似通っており同一固体か。338は土鉢の破片である。339は陶製もしくは焼成不良の磁器の杯。口縁部は外反し、薄黄色の釉を施す。

P009 出土遺物（340）

340は土師皿の破片。

P010 出土遺物（341～343）

341は陶器の擂鉢の口縁部で、口縁部に粘土を貼り付け玉縁状に作る。342は陶器の鉢の底部で内面白色釉、外面は高台削り出し。遺存部分はほぼ露胎。343は土師質の瓦。

P012 出土遺物（344）

344は白磁の杯の口縁で、口縁部は外反する。

P015 出土遺物（345）

345は瓦質の擂鉢の底部で、擂り目の磨耗が進む。二次焼成により色調は赤褐色化。

P016 出土遺物（346）

346は土師器の杯の口縁部。

P017 出土遺物（347）

347は土師皿である。

P019 出土遺物（348）

348は陶器の碗である。内面に三箇所、重ね焼の痕跡が残る。底部露胎。

P023 出土遺物（349）

349は陶器の碗。内外面に貝殻を模した装飾を施し、高台を除いて白色釉を施す。露胎部分は橙色。

P024 出土遺物（350）

350は瓦質の擂鉢の底部で、擂り目の磨耗が進む。

P025 出土遺物（351）

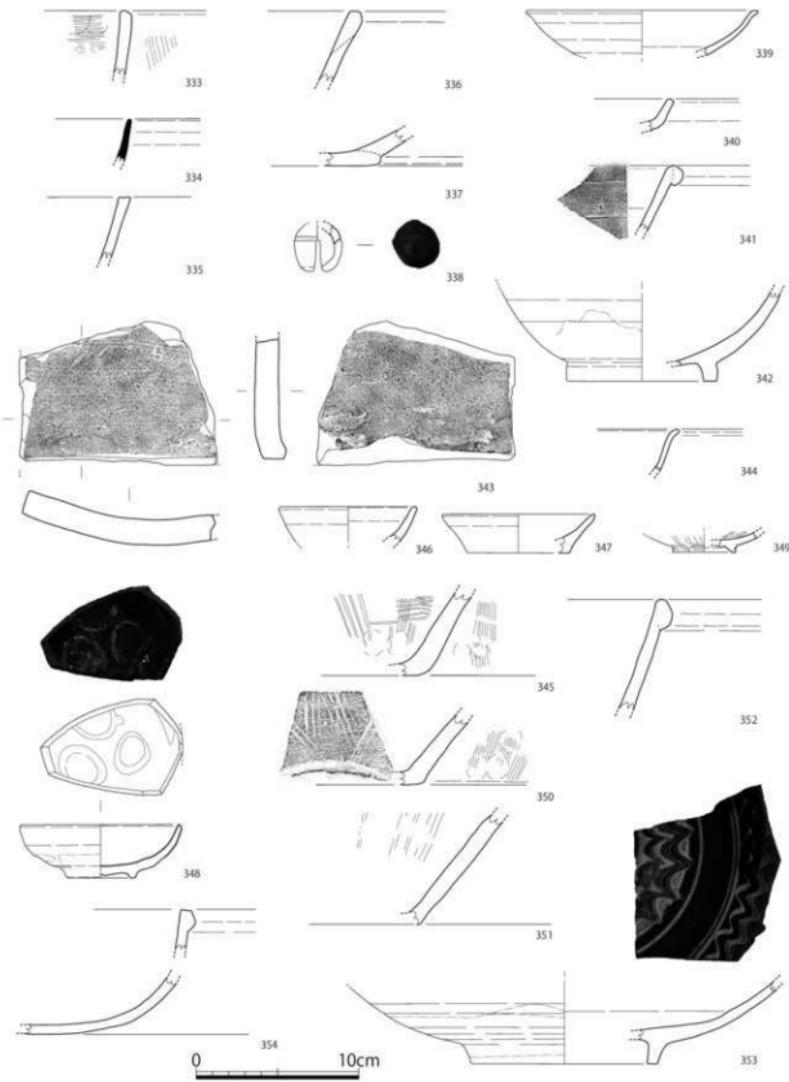


Fig.37 その他の出土遺物 (1) (S = 1/3)

351は土師質の擂鉢の底部で、擂り目の磨耗が著しい。

P036 出土遺物 (352)

352は土鍋の口縁で、断面三角形に作る。外面は煤の付着が著しい。

P040 出土遺物 (353)

353は陶器のこね鉢の底部で、内面見込みに砂目跡が残る。

P047 出土遺物 (354)

354は土鍋の口縁部と丸底の底部の破片で同一固体と思われる。外面は煤の付着が著しい。

P048 出土遺物 (355)

355は白磁の碗の底部。

P050 出土遺物 (356)

356は土鍋の口縁部で、口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させている。

P052 出土遺物 (357)

357は青磁碗の口縁部破片。連弁が完全に省略されて沈線となっている。16世紀末。

P053 出土遺物 (358)

358は陶器の碗で灰色釉を高台以外に施し、外面に鉄絵を描く。

P054 出土遺物 (359)

359は陶器の皿か。外面下半は露胎。内面は褐色釉を施した後暗褐色釉で模様を描く。

P055 出土遺物 (360 ~ 366)

360は瓦質の鍋の口縁部で素口縁。外面はナデ、内面はハケ調整を施す。361は陶器の碗の底部で、高台削り出し。外面はほぼ露胎。内面は青緑色釉を施し、内面見込みを輪状に搔き取る。362は陶器の碗で、口縁部は外反し、高台削り出し。高台以外に明褐色釉を施し、内面見込みを輪状に搔き取る。363は碗の底部で、高台を高く作る。全面に褐色釉を施した後、白色釉で文様を描く。364は陶器の擂鉢の口縁部で、口縁部を肥厚させ玉縁状に作る。365は陶器のこね鉢の口縁部で、口縁部折り曲げ。内面及び外面上半に褐色釉を施した後白色釉で文様を描き、口縁部に青緑色釉を施す。366は陶器の皿の底部で高台欠落。全体にオーリーク色釉を施し、口縁部に向かって完乳が貫入が発達する。

P056 出土遺物 (367)

367は砂岩製の砥石と思われるが、側面が平滑である。ただし、この面には磨り痕は認められない。

P057 出土遺物 (368・369)

368は土師皿片で、底部回転系切。369は土鍋の口縁部で、口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させる。外面はハケ目、内面ナデ調整。外面煤の付着が激しい。

P060 出土遺物 (370)

370は土師皿の底部破片で、回転系切。

P062 出土遺物 (296)

296は用途不明品。三足の台か。

P073 出土遺物 (371)

371は土鍋の口縁部破片で、口縁部に粘土を貼り付け玉縁状に作る。外面ハケ目、内面ナデ調整。

P085 出土遺物 (372 ~ 374)

372は陶器の碗の底部。内面及び外面上半に褐色釉を施し、内面見込みを輪状に搔き取る。373は磁器の獅子の頭部。前面と後面を型で作り接合。接合部の内面には粘土を張り付けて密着力を上げようとしている。また口の部分は小さな丸い穴を開け、焼成時の空気の抜け道としている。374は瓦質の土鍋口縁。素口縁で外面下方はハケ目、その他はナデ調整。外面上部には煤が少し付着する。

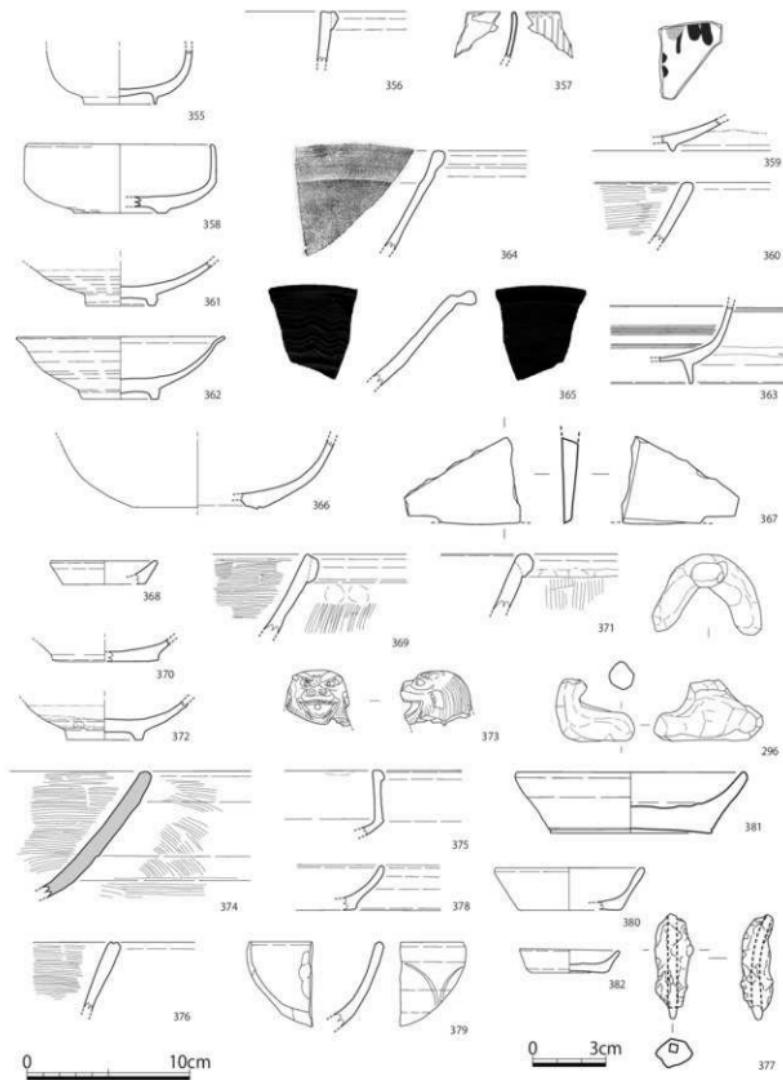


Fig.38 その他の出土遺物 (2) (S = 1/3 • 1/2)

P088 出土遺物 (375)

375 は陶器の碗。口縁部は肥厚させ胴部は強く屈曲する。口縁部から外面の胴部屈曲部にかけて施釉。

P089 出土遺物 (376)

376 は土鍋の口縁部。素口縁で内面ハケ目、外面は煤が付着する。

P094 出土遺物 (377)

377 は断面方形の鉄釘。

P097 出土遺物 (378)

378 は土師皿。

P098 出土遺物 (379)

379 は竜泉窯系青磁の碗で、外面に連弁を彫り、明灰色の素地に明青緑色の施す。

P099 出土遺物 (380)

380 は土師器の环で、二次焼成を受ける。

P126 出土遺物 (381)

381 は土師皿。

P131 出土遺物 (382)

382 は土師器の小皿。

P151 出土遺物 (383)

383 は土師器の小皿。内面の立ち上がり部分に刺突痕が見られる。

P155 出土遺物 (384)

384 は土師皿で、口縁部に油煙が見られる。灯明皿か。

P156 出土遺物 (385)

385 は土鍋の口縁部。口縁部に粘土帯を貼り付け玉縁状に作る。内外面共にナデ調整。外面は煤が少し付着する。

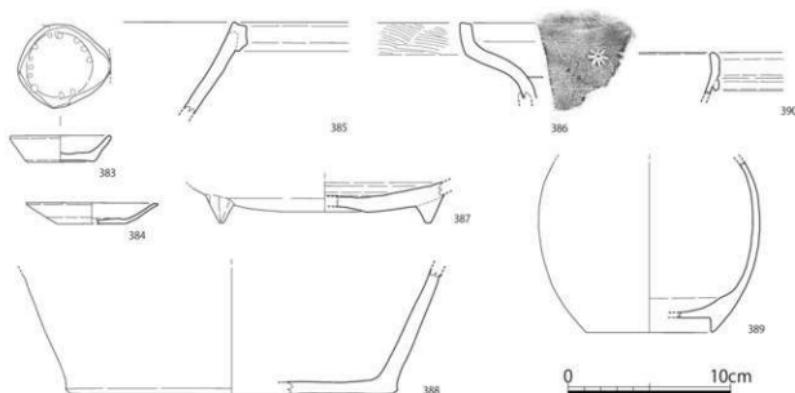


Fig.39 その他の出土遺物 (3) (S = 1/3)

P176 出土遺物 (386)

386 は瓦質の釜の口縁部。肩部に 1 条の沈線を施し、その上に菊花文をスタンプする。二次焼成により赤色化。

P185 出土遺物 (387)

387 は陶器の薬缶の底部。内面は白濁釉を施し、外面露胎。器を安定させる為の小さな支脚をつける。また外面は煤の付着が多い。SE100 の 107 と同型品。

P196 出土遺物 (388)

388 は陶器の甕の底部。外面は紫蘇釉、内面露胎で赤紫色。

P200 出土遺物 (389・390)

389 は陶製の壺の底部で、外面に褐色釉と黄白色釉を施す。390 は陶製の不明品の口縁部。内側に蓋を受けるような部分を作っている。

第4章 考察

今回行われた羽犬塚屋舎ノ二遺跡の調査は、羽犬塚町における町屋部分の初めての本格的な調査であった。しかし、当初の予測以上の遺構密度が確認され、十二分な記録が作成されたとは言い難い。しかしながら、今後羽犬塚町における発掘調査での留意点をいくつも我々に提示してくれたとも言える。今回はこれらを記してまとめさせて頂きたい。

羽犬塚町の北には、古代西海道および葛野駅家に関連する遺跡（葛野駅家推定地）が存在する。今回の調査でも少量ながら該当期の須恵器片・土師器片などが採集されている。葛野駅家推定地はどこまで広がりを見せるのかまだ不明であり、今回の遺構・遺物が今後の調査で南限を示すものに成りうるかも知れない。

ここで問題となるのがSK105の解釈である。ここから出土したものは近世所産の土師器や陶磁器類であるが、出土状況は不明である。また、検出時点ではこれには粘土が付随していたようだが、これに関連する図面や写真も残されていない。SK105から出土した炭化物は写真からは比較的新しいように見受けられる。調査担当者はこれを「カマド」と認識している。

羽犬塚町は戦国時代には集落として存在していたことは前述の通りである。今回の調査ではわずかながら該当する時期の遺物を出土している。今回の調査では中世・近世の遺構の分離が意識されていなかったため、遺構にどのような違いが見られるのかは不明であるが、羽犬塚町成立の様相を解明するため留意しなければならない。

近世ではこの地は旅籠があったと推定される場所であり、今回の調査もそこに主眼が置かれていたものと推察する。羽犬塚町は近世薩摩街道に面して町屋が3.5ないしは4間の間取りで東西に作られていた。しかし、今回の調査ではあまりの柱穴の多さから建物を復元しうる状況ではない。また、近世のものと思われる遺物も比較的少ない状況である。今回検出された柱列A・BとC間の幅はそれぞれ3.5m・2.5mとなるが、これらの設定が完備された状態での図上復元であり、また時期的なものもきちんと精査しているものではない。

羽犬塚町は車が通り抜けるにも軒に接触する危険があるほど道幅が狭かったため、戦時に物資輸送の便を確保する為道幅の拡幅が行われ、戦後も昭和30～40年代にかけて国道209号の整備が進められている。この為既存建物の立替が行われたと推察することができる。今回大量の遺物を出土したSE100の埋没時期はこの頃ではないだろうか。今回大量の遺物を出土したSE100からは近世から現代まで幅広い遺物が採取されたが、ここからは水田焼の素焼きの赤瓦と共に久留米市城島町で生産された桟瓦も出土している。これは水田窯の瓦生産減少に伴い城島瓦が市内に普及していったことを示していると思われる。

【参考文献】

『筑後市史』

筑後市史編さん委員会

1995

筑後市史編さん委員会

写 真 図 版



羽犬塚屋舗ノ二遺跡から御茶屋跡（羽犬塚小学校）を見る

P.L.1



羽犬塚屋舎ノ二遺跡 検出状況（東から）



羽犬塚屋舎ノ二遺跡 検出状況（西から）

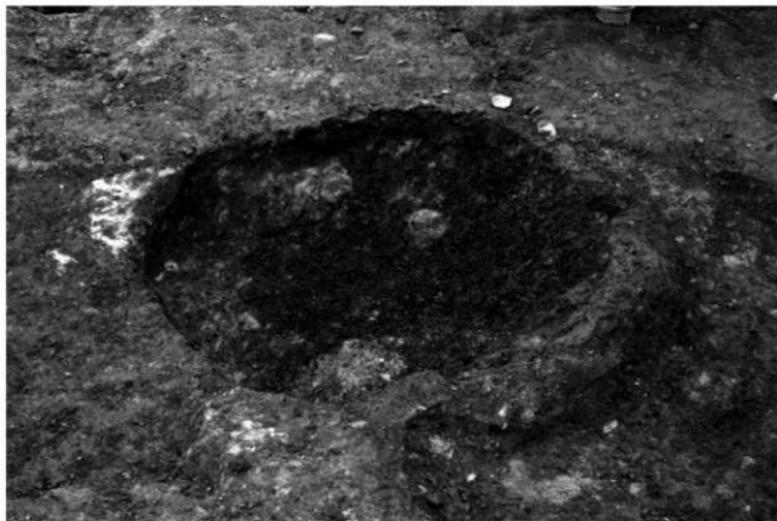


羽犬塚屋舗ノ二遺跡 全景（上から）



羽犬塚屋舗ノ二遺跡 全景（東から）

P.L.3



SK105 検出状況

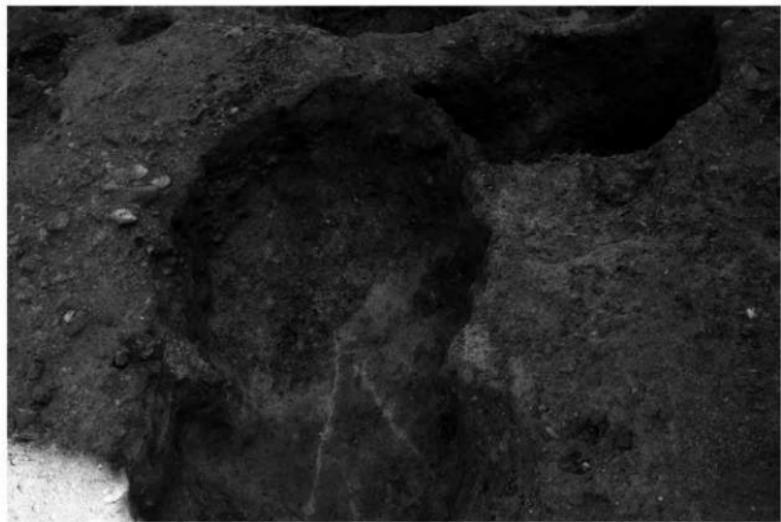


SK105 カマド検出状況（西から）

P.L.4



SK105 土層断面（北から）

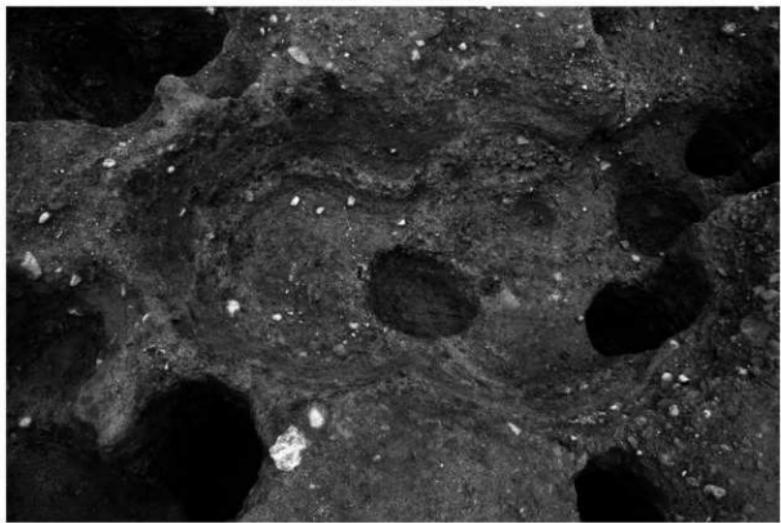


SK105 完掘状況（西から）

P.L.5



SK030 埋甌（西から）



SK030 完掘状況（南から）



SK070 埋糸（南から）

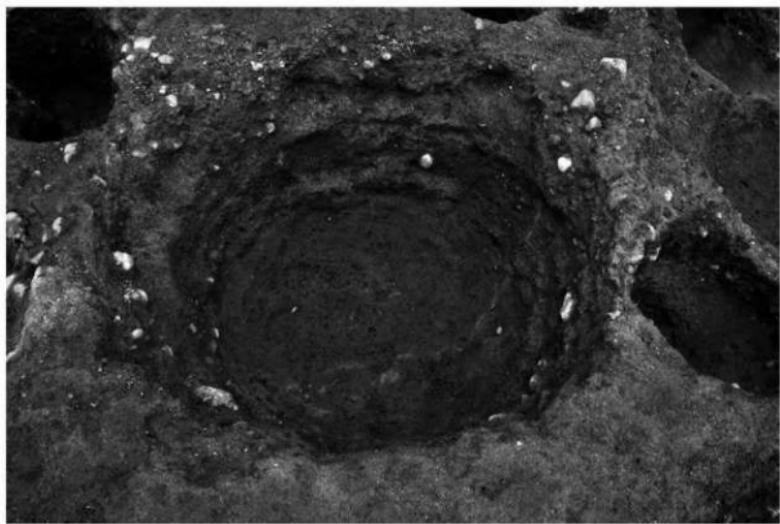


SK070 完掘状況（南から）

P.L.7



SK175 埋葬（北東から）



SK175 完掘状況

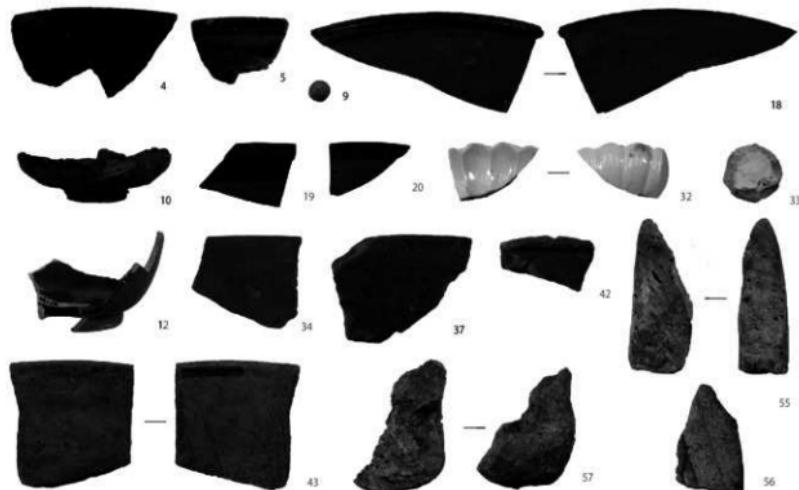


SK170 埋甕

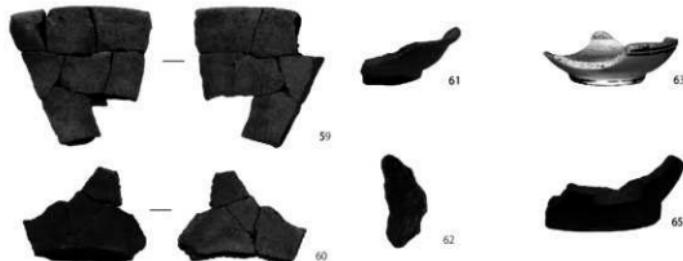


SK190 (北から)

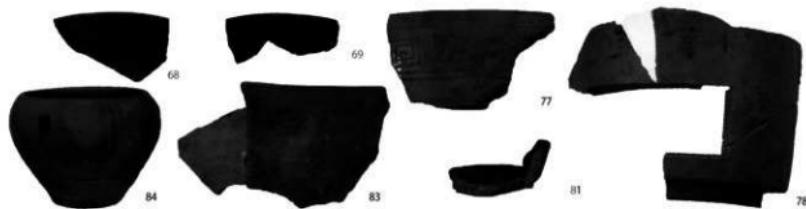
P.L.9



柱穴列 A 出土遺物



柱穴列 B・C 出土遺物

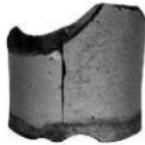


SE100 出土遺物 (1)



SE100 出土遺物 (2)

P.L.11



SE100 出土遺物 (3)

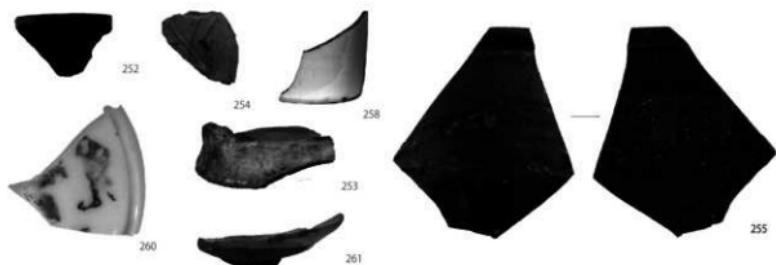


SE100 出土遺物 (4)

P.L.13



SE100 出土遺物 (5)

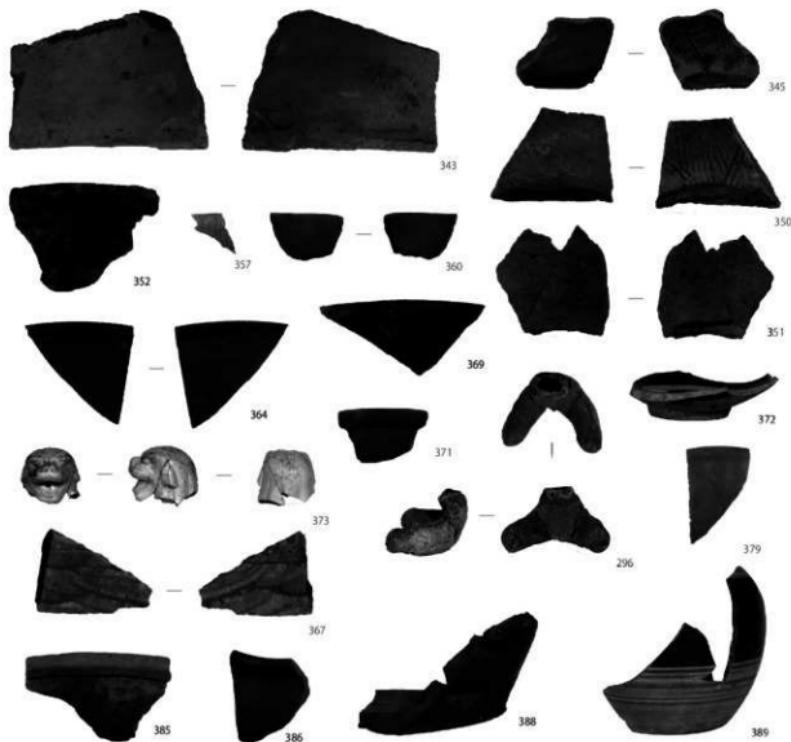


SE100 (P095) • SE110 出土遺物



SK030 出土遺物





その他の出土遺物

筑後市文化財調査報告書 第108集

羽犬塚屋鋪ノ二遺跡

平成25年3月31日

発行 築後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

TEL 0942-53-4111

印刷